

領域略称名：イスラーム信頼学
領域番号：20A104

令和5年度
科学研究費助成事業「学術変革領域研究（A）」
に係る中間評価報告書

「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築：
世界の分断をのりこえる戦略知の創造」

領域設定期間

令和2年度～令和6年度

令和5年6月

領域代表者

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

黒木英充

目 次

研究組織

1	総括班・総括班以外の計画研究	1
2	総括班・総括班以外の計画研究の研究代表者・研究分担者	2
3	公募研究	8

研究領域全体に係る事項

4	研究領域の目的及び概要	10
5	審査結果の所見で指摘を受けた事項への対応状況	12
6	研究の進展状況及び主な成果	13
7	研究発表の状況	27
8	研究組織の連携体制	32
9	若手研究者の育成に係る取組状況	33
10	アウトリーチ活動に係る取組状況	34
11	研究費の使用状況・計画	35
12	今後の研究領域の推進方策	36
13	総括班評価者による評価	38

研究組織

(令和5年6月末現在。ただし完了又は廃止した研究課題は完了・廃止時現在。)

1 総括班及び総括班以外の計画研究

研究項目[1]	課題番号 研究課題名	研究代表者 氏名	所属研究機関・部局・職	人数[2]
X00 総	20H05823 イスラーム的コネクティビティにみる 信頼構築：世界の分断をのりこえる戦 略知の創造	黒木英充	東京外国語大学・アジア・ア フリカ言語文化研究所・教授 (併任・北海道大学・スラブ・ ユーラシア研究センター・教 授)	8
A01 計	20H05824 イスラーム経済のモビリティと普遍性	長岡慎介	京都大学・大学院アジア・ア フリカ地域研究研究科・教授	8
A02 計	20H05825 イスラームの知の変換	野田仁	東京外国語大学・アジア・ア フリカ言語文化研究所・准教 授	8
A03 計	20H05826 移民・難民とコミュニティ形成	黒木英充	東京外国語大学・アジア・ア フリカ言語文化研究所・教授	8
B01 計	20H05827 イスラーム共同体の理念と国家体系	近藤信彰	東京外国語大学・アジア・ア フリカ言語文化研究所・教授	9
B02 計	20H05828 思想と戦略が織りなす信頼構築	山根聡	大阪大学・大学院人文学研究 科(外国学専攻、日本学専 攻)・教授	8
B03 計	20H05829 紛争影響地域における信頼・平和構築	石井正子	立教大学・異文化コミュニケ ーション学部・教授	9
C01 計	20H05830 デジタルヒューマニティーズ的手法に よるコネクティビティ分析	熊倉和歌子	慶應義塾大学・経済学部(三 田)・教授	8
総括班及び総括班以外の計画研究 計 8 件(廃止を含む)				

[1] 総：総括班、計：総括班以外の計画研究

[2] 研究代表者及び研究分担者の人数(辞退又は削除した者を除く。)

2 総括班及び総括班以外の計画研究の研究代表者・研究分担者

研究項目：X00

研究課題名：イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築：世界の分断をのりこえる戦略知の創造

代表／分担	研究者氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
代表	黒木英充	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授（併任・北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授）	全体の総括
分担	太田信宏	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授	事務局の総括
分担	長岡慎介	京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授	公募研究担当
分担	野田仁	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授	編集・出版担当
分担	近藤信彰	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授	編集・出版担当
分担	山根聡	大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・教授	国際活動担当
分担	石井正子	立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授	国際活動担当
分担	熊倉和歌子	慶應義塾大学・経済学部・教授	広報担当
合計 8 名			

研究項目：A01

研究課題名：イスラーム経済のモビリティと普遍性

代表／分担	研究者氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
代表	長岡慎介	京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・教授	研究全体の取りまとめ、近現代におけるイスラーム世界の貨幣・金融制度の探究
分担	亀谷学	弘前大学・人文社会科学部・准教授	前近代におけるイスラーム世界の貨幣・金融制度の探究

分担	五十嵐大介	早稲田大学・文学学術院・教授	前近代におけるイスラーム世界の市場と所有制度の探究
分担	小茄子川歩	京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・特任准教授	古代史・南アジアからみたイスラーム経済の独自性の探究
分担	平野美佐	京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・教授	アフリカからみたイスラーム経済の独自性の探究
分担	岩崎葉子	独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・地域研究センター中東研究グループ・研究グループ長	近現代におけるイスラーム世界の所有制度の探究
分担	安田慎	高崎経済大学・地域政策学部・准教授	近現代におけるイスラーム世界の市場制度の探究
分担	町北朋洋	京都大学・東南アジア地域研究研究所・准教授	経済理論・東南アジアからみたイスラーム経済の独自性の探究
合計 8 名			

研究項目：A02

研究課題名：イスラームの知の変換

代表／分担	研究者氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
代表	野田仁	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授	研究の総括および中央ユーラシア国境地域における紛争解決
分担	矢島洋一	奈良女子大学・人文科学系・教授	東方へのスーフィズムの展開
分担	中西竜也	京都大学・人文科学研究所・准教授	中国におけるイスラームの展開
分担	坪井祐司	名桜大学・国際学部・上級准教授	近代東南アジア知識人のイスラーム言説
分担	高野さやか	中央大学・総合政策学部・准教授	東南アジアにおける法の多元性
分担	濱本真実	大阪公立大学・大学院文学研究科・教授	ロシア・中国間の国際貿易
分担	和田郁子	岡山大学・社会文化科学学域・准教授	南アジア沿海部における諸集団間関係
分担	高松洋一	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授	オスマン朝下の民族間関係と法
合計 8 名			

研究項目：A03

研究課題名：移民・難民とコミュニティ形成

代表／ 分担	研究者氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
代表	黒木英充	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授（併任・北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授）	全体の統括
分担	池田昭光	明治学院大学・教養教育センター・助教	移民とコネクティビティの理論的研究
分担	子島進	東洋大学・国際学部・教授	ムスリム NGO のコネクティビティ
分担	岡井宏文	京都産業大学・現代社会学部・准教授	在日ムスリムのネットワーク形成
分担	中野祥子	山口大学・教育・学生支援機構・講師	ムスリム移民と受け入れ側社会の心理学的研究
分担	村上忠良	大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・教授	東南アジアの移民・難民のコミュニティ形成戦略
分担	昔農英明	明治大学・文学部・専任准教授	ヨーロッパのムスリム難民のコネクティビティ
分担	長有紀枝	立教大学・21世紀社会デザイン研究科・教授	ムスリム難民の国際政治におけるコネクティビティ
合計 8 名			

研究項目：B01

研究課題名：イスラーム共同体の理念と国家体系

代表／ 分担	研究者氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
代表	近藤信彰	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授	イスラーム国家体系の理念と現実；総括
分担	秋葉淳	東京大学・東洋文化研究所・教授	オスマン帝国エリートのコネクティビティ
分担	黛秋津	東京大学・大学院総合文化研究科・教授	ヨーロッパ・中東国際関係
分担	長縄宣博	北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授	ロシア・ムスリム・エリートのコネクティビティ
分担	太田信宏	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・	南アジアにおけるムスリム・非ムスリムの関係

		教授	
分担	真下裕之	神戸大学・人文学研究科・教授	インド・ムスリム・エリートのコネクティビティ
分担	堀井優	同志社大学・文学部・教授	地中海における国際関係と商業
分担	馬場多聞	立命館大学・文学部・准教授	インド洋における国際関係と商業
分担	沖祐太郎	九州大学・法学研究院・専門研究員	イスラーム国際法の理論と応用
合計 9 名			

研究項目：B02

研究課題名：思想と戦略が織りなす信頼構築

代表／分担	研究者氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
代表	山根聡	大阪大学・大学院人文学研究科(外国学専攻、日本学専攻)・教授	全体の統括、南アジアのムスリムのコネクティビティ
分担	飯塚正人	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授	現代イスラーム思想における他者とのコネクティビティ
分担	青山弘之	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授	中東における国際関係
分担	中溝和弥	京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・教授	インドにおけるムスリムと非ムスリムのコネクティビティ
分担	工藤正子	桜美林大学・リベラルアーツ学群・教授	ムスリム移民社会におけるコネクティビティ
分担	菅原由美	大阪大学・大学院人文学研究科(外国学専攻、日本学専攻)・教授	ジャワにおけるムスリムと非ムスリムのコネクティビティ
分担	池田一人	大阪大学・大学院人文学研究科(外国学専攻、日本学専攻)・准教授	ミャンマーにおけるムスリムと非ムスリムのコネクティビティ
分担	後藤絵美	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・助教	ジェンダー間におけるコネクティビティ
合計 8 名			

研究項目：B03

研究課題名：紛争影響地域における信頼・平和構築

代表／ 分担	研究者氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
代表	石井正子	立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授	研究総括、IS とのコネクティビティに関する調査研究
分担	小副川琢	日本大学・国際関係学部・准教授	シリア内戦およびレバノン内戦における和平努力の比較：外部勢力の関与と信頼醸成研究分担者に関する調査研究
分担	見市建	早稲田大学・国際学術院(アジア太平洋研究科)・教授	インドネシアにおける女性ジハードリストの社会復帰(プログラム)に関する調査研究
分担	飛内悠子	盛岡大学・文学部・教授	南北スーダン間の「軍(武装勢力)」同士の関係を通してみる紛争と平和構築に関する調査研究
分担	鈴木啓之	東京大学・大学院総合文化研究科・特任准教授	離散先で取り結ぶ人間関係(パレスチナ人と他者)に関する調査研究
分担	武内進一	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授	ムスリム・非ムスリム間紛争の形成に関する調査研究
分担	日下部尚徳	立教大学・異文化コミュニケーション学部・准教授	バングラデシュにおけるロヒンギャ難民の受容と信頼に関する調査研究
分担	熊倉潤	法政大学・法学部・教授	新疆ウイグル自治区における政府と民衆：相互の信頼あるいは不信に関する調査研究
分担	佐原哲也	明治大学・政治経済学部・専任教授	トルコ、ブルガリア、ギリシアにおける移民難民問題と国境管理等に関する調査研究
合計 9 名			

研究項目：C01

研究課題名：デジタルヒューマニティーズ的手法によるコネクティビティ分析

代表／ 分担	研究者氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
代表	熊倉和歌子	慶應義塾大学・経済学部(三田)・教授	計画研究班のマネジメント、歴史的データの可視化分析
分担	新井和広	慶應義塾大学・商学部(日吉)・教授	インド洋海域のコネクティビティ分析
分担	伊藤隆郎	神戸大学・人文学研究科・准教授	東アラブ地域のコネクティビティ分析
分担	篠田知暁	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員	マグリブ地域のコネクティビティ分析

分担	石田友梨	岡山大学・学術研究院社会文化科学学域・准教授	南アジア地域のコネクティビティ分析
分担	後藤寛	横浜市立大学・国際教養学部（都市学系）・准教授	地理情報システムを用いたコネクティビティについての時空間分析
分担	マレット アレクサンデル	早稲田大学・国際学術院・准教授	ムスリムとキリスト教徒の社会関係の分析
分担	永崎研宣	一般財団法人人文情報学研究所・人文情報学研究部門・主任研究員	アラビア文字テキストへのテキストエンコーディングの応用
合計 8 名			

3 公募研究

研究 項目[1]	課題番号 研究課題名	研究期間	研究代表者 氏名	所属研究機関・部局・職	人数 [2]
公	21H05380 イスラーム福祉制度を通じた互助 の信頼学：金融デジタル化を用いた 寄進の新展開	令和3年度 ～ 令和4年度	KHASHAN AMMAR	立命館大学・立命館アジア・ 日本研究機構・准教授	1
公	21H05373 「やさしいウルドゥー語」と多言 語社会を巡る基礎的研究	令和3年度 ～ 令和4年度	須永恵美子	東京大学・附属図書館・特任 研究員	1
公	21H05371 18～19世紀のロシアにおけるイス ラーム法学の継承をめぐるムスリ ム知識層の形成	令和3年度 ～ 令和5年度	磯貝真澄	千葉大学・大学院人文科学 研究院・准教授	1
公	21H05374 前近代アラビア語史料のデジタル 解析による文民エリートの人的ネ クサス研究	令和3年度 ～ 令和5年度	太田絵里奈（塚田 絵里奈）	東京外国語大学・アジア・ア フリカ言語文化研究所・助 教	1
公	21H05378 計量テキスト分析とネットワーク 分析をもちいたイスラーム主義組 織の政治動員の研究	令和3年度 ～ 令和4年度	山尾大	九州大学・比較社会文化研 究院・准教授	1
公	21H05381 近代日本におけるイスラームに関 する知的動態とムスリム理解をめ ぐる知識社会学的研究	令和3年度 ～ 令和5年度	黒田賢治	国立民族学博物館・グロー バル現象研究部・助教	1
公	21H05377 SNSを媒体としたクルアーンがも たらすイスラーム的コネクティビ ティの変容	令和3年度 ～ 令和5年度	二ツ山達朗	香川大学・経済学部・准教授	1
公	23H03932 イスラーム法のワファー（契約の 誠実履行）の概念と適用：社会・経 済の信頼関係から	令和5年度 ～ 令和6年度	KHASHAN AMMAR	立命館大学・立命館アジア・ 日本研究機構・准教授	1
公	23H03927 日本・満洲・朝鮮半島生まれタタ ール移民のコネクティビティを巡 る語りの研究	令和5年度 ～ 令和6年度	沼田彩誉子	東京外国語大学・アジア・ア フリカ言語文化研究所・研 究員	1
公	23H03928 14～16世紀アラブ都市エリート間 の名目的コネクティビティの可視 化分析	令和5年度 ～ 令和6年度	太田絵里奈（塚田 絵里奈）	東京外国語大学・アジア・ア フリカ言語文化研究所・助 教	1
公	23H03933 イスラーム諸国の信頼醸成と合意 形成：人類互敬・同胞精神と現実政 治の拮抗の中で	令和5年度 ～ 令和6年度	池端露子	立命館大学・衣笠総合研究 機構・准教授	1

公	23H03929 有事と食糧：中東・北アフリカにおいて試されるコネクティビティと信頼構築	令和5年度 ～ 令和6年度	井堂有子	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員	1
公募研究 計 12 件（廃止を含む）					

[1] 公：公募研究

[2] 公募研究は研究代表者が1名で実施

研究領域全体に係る事項

4 研究領域の目的及び概要

研究領域全体を通じ、本研究領域の研究目的及び全体構想について、応募時の領域計画書を基に、具体的かつ簡潔に2頁以内で記述すること。なお、記述に当たっては、どのような点が「これまでの学術の体系や方向を大きく変革・転換させる」ものであるか、研究の学術的背景や領域設定期間終了後に期待される成果等を明確にすること。

【研究領域の目的】

今世紀に入り、様々なグローバル化の重層的進行と、越境的人間移動の日常化とにより地球的网络が高密度化する一方、経済的格差や文化的差異による分断・分極化が各地で深刻化してきた（越境的人間移動については近年の COVID-19 の拡がりやロシア・ウクライナ戦争による変異があるとはいえ、全体の基本的な傾向は変わっていない）。内戦やテロなど暴力の世界的拡散はその一つの現れである。2001年の9/11事件以後、イスラームという宗教・文明自体に他宗教・文明との対立が埋め込まれているとする言説は急速に流布し、シリア内戦に起因した「イスラム国 (IS)」やヨーロッパ難民危機の衝撃も相俟って、依然影響力があるように見える。しかし歴史を謙虚に振り返れば、イスラーム文明は「横への拡がり」、人と人の水平方向のつながりづくりに長けており、他者との間に信頼を構築する技術を発展させてきたからこそ、グローバルに拡大してきたと言える。本研究領域は、水平方向にネットワークを形成する過程の「つながりづくり」をコネクティビティの概念でとらえ、その暗黙知を言語化・可視化して、今日の世界において深刻化する分断・分極化の諸問題を解決するための視座を提供し、新たな提言を行うことを目指す。

【研究領域の概要】

研究の学術的背景

『文明 西洋が覇権をとれた6つの真因』（勁草書房 2012）など多数の邦訳書で知られる歴史学者ニール・ファーガソンは、従来の歴史学が国家や制度など垂直の権力関係の研究に集中し、水平的な人間同士の関係、ネットワークの問題を軽視してきたため、急速に変貌するインターネット社会の現状に対応できていないと批判し、ルネサンス期から現代までの欧米の歴史を、垂直・水平方向それぞれの動きが強まる時代の交替として描き出した（『スクエア・アンド・タワー』東洋経済新報社 2019,原著 2017）。

しかし、日本の歴史学においては、早くからフランス近世史の二宮宏之がソシアビリテ論のなかで「人と人の結びあうかたち」を提唱し、横のつながりは意識されてきた。これはネットワーク論に接続可能であり、長らく「階級」と「民族」に収斂していた歴史学の枠組みをのりこえ、近代国民国家の形成基盤を議論するための、新たな枠組みとして注目された（『二宮宏之著作集3』岩波書店 2011,初出 1995）。イスラーム史の分野でもインド洋商業における港市ネットワークの解明（家島彦一『イスラーム世界の成立と国際商業』岩波書店 1991）を先駆けに、ネットワークに関する実証研究や理論的分析が発表された。

その一方で、社会的ネットワーク研究は、主に社会学の分野で蓄積が進み、関連諸学に強いインパクトを与えてきたが、ネットワークのモデル化・理論化に際しては、現代の欧米社会において観察可能な事象に依拠するのがほとんどであり、アジア・アフリカの事象は視野の外にあった。

以上を踏まえて、全地球規模で信徒約20億人にまで拡大した1400年間の歴史を顧みるに、イスラーム文明における人々の水平的関係づくりをめぐる、多種多様な角度から、マルチディシプリンによる経験主義的な研究を進めるべき分野が広がっていることが理解されるのである。

従来の学術の体系や方向を大きく変革・転換させるもの

日本におけるイスラーム研究は、第二次世界大戦以前の地政学的「回教圏」研究が敗戦により断絶したことで、戦後にゼロから再出発した。欧米のオリエンタ学的伝統と日本の東洋学の実証主義的伝統とが融合して発展を遂げつつ、1970年代のオイルショックやイラン・イスラーム革命を受けて中東の政治経済的研究も新たに加わり、両輪をなしてきた。研究の高度化と共に専門分化が進行し、国際学界において注目を集める個別研究が生まれるようになった。その一方、1991年湾岸戦争、2001年9/11事件、03年

イラク戦争、2011年「アラブの春」とシリアなどでの内戦開始といった世界を揺るがす事件が起こるたびに、これをイスラームから本質主義的に説明する言説やイスラモフォビア的見方を強化する言説の氾濫に有効に対応できてこなかったのを認めざるを得ない。たとえば高校教科書におけるイスラームの記述に大きな改善が見られたのは確かであるが、それが長く強固に形成されてきたイスラームに対する人々の見方を変えるには至っていないのである。

この現状に対して、本領域研究はコネクティビティと信頼構築のキーワードを梃子として、上述のイスラームをめぐる学術的沃野を開拓することにより、世界に横溢する分断・分極化をのりこえるための視座を提供することを試みるが、イスラームの宗教思想の分析を深く極めてその独自性を解明することにより、そこから演繹的にその視座を導出する方向ではなく、7世紀以来拡大してきたイスラーム文明の総体の中からコネクティビティと信頼構築の「暗黙知」を発掘して集め、それを「戦略知」に鍛え上げるという、経験論的傾向を有す。その変革的内容を計画研究班毎に一言で示すならば

- ・A01：イスラーム経済の起源の多元性と高い汎用性をもつポスト資本主義の構想力
- ・B01：国家間関係におけるコネクティビティ概念の有効性と従来イスラーム国家像の革新
- ・A02：言語や法体系の多数性のなかで翻訳・通訳すること（/しないこと）と信頼の相関
- ・B02：ムスリムの思想と行動に見られる、状況に応じた極めて柔軟な戦略的選択
- ・A03：ムスリム移民・難民の越境的主体性に注目したコネクティビティと政治的運動の見直し
- ・B03：紛争下で対立する人々の間をつなぐ媒介者をめぐる信頼と不信のダイナミズム

が主要な要素であるが、これら相互に関連し合う問題群をイスラーム文明の歴史の中で育まれてきた人々の高い移動性（巡礼・長距離交易・知識人の学的移動・遊牧・騎馬軍団など）や、他者との交渉と折り合いをつける共存の技術、イスラーム法の普遍世界における属人法的性格ゆえの人間関係領域の厚みなどにつながり、従来イスラーム研究に見られなかった新たな戦略知の提示が可能になる。

またC01のデジタルヒューマニティーズ研究は、これまで研究者が長い時間をかけてようやく経験的に漠然と知覚することができた（あるいはそれでも知覚できなかった）事象間の関係性やネットワークについて、それを次々と可視化することに成功しており、その活動全体が変革性を強く帯びている。それが他の計画研究班やそれを超えた範囲に強い刺激を与えており、従来イスラーム研究には見られなかった領域を開拓している。

領域設定期間終了後に期待される成果

すでに、本領域の研究成果の一つとして、東京大学出版会より「シリーズ イスラームからつなぐ」全8巻の刊行が決定しており、総括班メンバーを中心とした執筆陣による第1巻『イスラーム信頼学へのいざない』が刊行された（2023年3月）。今後、2023年度中に計画研究班A01、A02、A03による第2巻から第4巻まで、2024年度中にB01、B02、B03、C01による第5巻から第8巻までを刊行する予定である。第1巻は高校生までを射程とした一般読者に向けて、徹底的に平易な表現を心がけて本領域研究の全体像を示した。第2巻以降は従来学術書の体裁をとるが、なお一般読者を意識して分かりやすい内容にする。

<https://www.utp.or.jp/book/b10031208.html>（東京大学出版会）

https://hondana-storage.s3.amazonaws.com/131/files/230324_Islam.pdf（シリーズ全体のパンフレット）

本領域に研究分担者・協力者あるいは研究員として参加した研究者たち、とりわけ多くの若手研究者たちが、個別にあるいは共著による論文執筆を開始しているが、さらにこの参加経験をもとに新たな共同研究を組織していくことも想定される。

約50年後の2070年の世界では、イスラームの宗教人口がキリスト教を抜いて世界最大になると予測されている。一方、同じ期間で日本の人口はおよそ1億2600万から8700万に3割減少すると厚生労働省が予測しているが、これは滞日外国人の増加とその相対的に高い合計特殊出生率を前提としている。日本において今後ムスリム人口の割合が高まることは不可避であり、のみならず、世界の中で日本の針路を考えるうえでもその的確な理解はますます必要になろう。近年、世界における超大国の比重の低下と多極化の進展がつとに指摘され、「グローバル・サウス」の力の増大が実感されるようになった。イスラームのプレゼンスはそこでも高まるのが確実である。以上より、本領域研究の持つ意味もますます大きなものとなろう。

5 審査結果の所見で指摘を受けた事項への対応状況

研究領域全体を通じ、審査結果の所見において指摘を受けた事項があった場合には、当該指摘及びその対応状況等について、具体的かつ簡潔に2頁以内で記述すること。

- 1) 理論研究と応用的研究にそれぞれ3つの計画研究を配しており、システムティックな構成になっているが、より一層横のつながりの連携と共時的な手法の重視が期待される。
→ 各年度の国際会議を計画研究班 A,B の 01・02・03 班同士で企画することに加えて、ワークショップ（研究会）を原則として複数の計画研究班の共催とすることを原則としたため、横のつながりは強化されてきたと考える。月例の総括班会議のみならず、月例の Junior 会議という各計画研究班の研究員を中心とした若手研究者の会議も開催されている（後述の「9 若手研究者の育成に係る取組状況」の②を参照）。
- 2) 計画研究を可視化する試みとしてのデジタルヒューマニティーズが新たな計画研究(C01)として立てられているが、対象や分野がやや限定的であるので、歴史研究のみならず、現代イスラーム社会の分析まで含めて、積極的に推進することが望ましい。
→ 公募研究の2021年度枠で、山尾大による「計量テキスト分析とネットワーク分析をもちいたイスラーム主義組織の政治動員の研究」を得て、その成果は「シリーズ イスラームからつなぐ」第1巻『イスラーム信頼学へのいざない』において山尾大「中東で政治的な信頼をはかる イラクでの世論調査から考える」として発表された。しかし、現代イスラーム社会を対象にデジタルヒューマニティーズの手法を用いる研究者が非常に少なく、対応が遅れたことは否めない。今後、ワークショップに招聘するなどの形で研究者を探して巻き込んでいきたい。
- 3) 若手・中堅研究者の重点的な参画への配慮も好感が持てるが、成果の公開も含めて、より一層の努力を期待したい。
→ 後述の「9 若手研究者の育成に係る取組状況」の部分をご覧いただきたいが、若手研究者が様々な形で参画しており、さらなる参画の拡大、大学院生やPDが応募・参加しやすい環境を整えたい。
- 4) 新型コロナ状況が予断を許さないなか、海外調査の手法やその代替案を含めての検討が今後不可欠になる。
→ オンラインでの研究会議開催、海外機関への調査委託の形で乗り越えたと考えており、今後は通常の渡航・招聘が可能になる。オンラインで代替可能なことは積極的に対応していく。この間に明らかになったことは、事務的打合わせはオンラインが効率的であるのに対して、研究の性格が強くなればなるほど、対面形式の重要性が増すということであった。
- 5) 個人情報分析や公表に関しては十分な配慮が望まれる。
→ 各大学のガイダンスを遵守して配慮しつつ対応している。

なお、本領域研究のサブタイトル「世界の分断をのりこえる戦略知の創造」が過大ではないかとの指摘もあったようであるが、もちろん、ある「戦略知」が世界の分断状況を一気に解決するのではないことを自覚している。その手がかりはイスラーム文明の総体の中に、我々の身近な生活世界と結び付いた形で様々な存在しているはずなので、それを発掘し、鍛え上げて提示することを目指すものである。

6 研究の進展状況及び主な成果

(1) 及び(2)について、計画研究及びそれと連携している公募研究ごとに、具体的かつ簡潔に記述すること。
(一つの計画研究及び連携する公募研究で2頁以内)

(1) 領域設定期間内及び中間評価実施時までには何をどこまで明らかにしようとし、中間評価実施時までにはどこまで研究が進展しているのか

(2) 各計画研究で得られた成果、及びそれぞれの計画研究と連携している公募研究で得られた成果について、(計画研究・連携する公募研究の順で記載すること。なお、本研究領域内の共同研究等による成果の場合はその旨を明確にすること。)

A01 班：イスラーム経済のモビリティと普遍性

(1) 研究計画と現時点での研究の状況について

本研究は、歴史的イスラーム経済実践および現代に再構築されたイスラーム経済実践に着目し、そこで見られる特有の経済制度(貨幣・金融、市場、所有制度)の独自性と普遍性を比較経済史的観点から解明するものである。そして、それらの制度によって育まれてきたイスラーム経済知が、普遍的戦略知としてポスト資本主義時代の地球社会システムの構築のためにどのような貢献ができるかを探究することを目指している。

以上の目的を達成するために、本研究では以下の3つの小課題に分けて研究を進めている。

①イスラーム経済制度の歴史的形成および現代的再構築の動態を貨幣金融、市場、所有の3つの制度に着目して明らかにする。

②イスラーム経済制度をイスラーム世界に近接する文明圏(アジア、アフリカ、ヨーロッパ)の類似の経済制度と比較し、両者の共通性(すなわちイスラーム経済の普遍性)や非共通性(すなわちイスラーム経済の独自性)を明らかにする。

③上記の2つの小課題から解明されたイスラーム経済制度の独自性と普遍性をもとに、普遍的戦略知としてポスト資本主義社会の構想に貢献しうるイスラーム経済知を発見する。

中間評価実施時までの期間では、①イスラーム経済制度の歴史的形成および現代的再構築の動態の解明と②イスラーム世界に近接する文明圏(アジア、アフリカ、ヨーロッパ)の類似の経済制度との比較研究に以下のような役割分担で並行して取り組んできた。(Khashan Ammar は公募研究代表者)

①イスラーム経済制度の歴史的形成および現代的再構築の動態の解明	
研究代表者/分担者	長岡慎介、五十嵐大介、岩崎葉子、亀谷学、安田慎、Khashan Ammar
海外の研究協力者	Mehmet Asutay (英国ダラム大学教授、経済学)
②イスラーム世界に近接する文明圏の類似の経済制度との比較研究	
研究分担者	小茄子川歩、平野美佐、町北朋洋
海外の研究協力者	Sébastien Lechevalier (フランス社会科学高等研究院教授、経済学)

①については、イスラーム特有の貨幣・金融、市場、所有の3つの制度に注目し、その歴史的形成と現代的再構築の動態の解明に取り組んだ。具体的に注目する制度と担当は以下の表のとおり。

	前近代	→	現代	担当メンバー
貨幣金融	サッーフ(両替送金商)	再構築	イスラーム金融	亀谷、長岡、Khashan、Asutay
市場	スーク/バーザール		グローバル・イスラーム市場	五十嵐、亀谷、安田、岩崎
所有	ワクフ(財産寄進制度)		複合的所有制度	五十嵐、岩崎

②については、イスラーム世界に近接する具体的な文明圏として、東南アジア、南アジア、アフリカ、ヨーロッパを取り上げ、そこで見られる経済実践から、①で取り上げたイスラーム経済制度の独自性や普遍性を評価することを試みた。具体的な地域の担当は以下の表のとおり。

東南アジア	町北	アフリカ／日本	平野
南アジア	小茄子川	ヨーロッパ	Lechevalier

(2) これまでの研究の成果について

上記①の課題からは、いずれの制度の考察でも、前近代から現代への単線的な経路によるイスラーム経済実践の変遷、およびイスラームの理念からの制度の単純な演繹的發展という図式で制度の動態を捉えることはできず、近接する文明圏やイスラーム世界各地の慣習的制度との相互交渉の中でイスラーム経済制度の発展と再構築が行われてきていることが明らかとなった。この考察結果は、研究代表者が出席した分野の異なる複数の国際会議・国際ワークショップの場でその概要が公表されている (Nagaoka 2021. “Mobility in the Islamic Economy: Its Potential for Application in Post-Capitalist Society,” Nagaoka 2023. “Toward a Comparative Analysis of 'Mobility' in Economic Institutions: An Inquiry from Islamic Economic Studies”)。また、2021年12月に開催された第1回イスラーム信頼学国際会議では、イスラーム経済研究を国際的に牽引する海外の研究者(うち1名は本計画研究の研究協力者)を招聘し、考察結果について議論を行った (Asutay 2021. “Re-imagining-and-constituting Islamic Economics through Moral Economy: State, Market and Civil Society,” Mohd Shafiai 2021. “The Malaysia’s Development of the Islamic Economy Development in Malaysia from the Early Stages to the Current Growth: From in the Relation between State and Market Perspective”)。

さらに、本領域の成果をまとめた「シリーズ イスラームからつなぐ」第1巻所収の論考にまとめられた (長岡 2023. 「未来をひらくイスラーム経済のつなぐ力——その思想と歴史から学ぶ」)。

②の課題からは、特に古代南アジア(インダス文明)の制度的構造や日本およびアフリカのインフォーマル金融制度(ROSCA)とイスラーム経済制度との共通性が見られることが判明した (小茄子川 2021. 「インダス文明の都市結節型広域ネットワーク——「国家」/イスラーム以前の貨幣・交換様式・バッファ=都市」, 平野 2023. 「利子に埋め込まれた信頼——沖縄の模合(頼母子講)から考える」)。

また、Khashan Ammarによる公募研究「イスラーム福祉制度を通じた互助の信頼学：金融デジタル化を用いた寄進の新展開」「イスラーム法のワファー(契約の誠実履行)の概念と適用：社会・経済の信頼関係から」からは、現代のFinTech(新しい金融技術)とイスラーム的金融制度との共通性も指摘された (Khashan 2021. “Gold Dinar, Cryptocurrency, and Waqf Crowdfunding: Reflections on Trustability of Fintech Tools from an Islamic Legal Perspective”)。

以上のような考察で解明されたイスラーム経済の独自性と普遍性については、本研究では「イスラーム経済のモビリティ(起源の多元性と高い汎用性)」として定式化した。その総合的な成果については、「シリーズ イスラームからつなぐ」第2巻(長岡編 2024. 『貨幣・所有・市場のモビリティ(イスラームからつなぐ2)』)として2023年度末に刊行予定であり、現在、その執筆および編集作業を実施中である。

※下記以外は「7 研究発表の状況」から引用した。

Asutay, Mehmet “Re-imagining-and-constituting Islamic Economics through Moral Economy: State, Market and Civil Society.” Presented at the 1st International Conference on Islamic Trust Studies: Conflict and Harmony between State and Market” 2021年12月5日(オンライン)。

Mohd Shafiai, Muhammad Hakimi bin “The Malaysia’s Development of the Islamic Economy Development in Malaysia from the Early Stages to the Current Growth: From in the Relation between State and Market Perspective.” Presented at the 1st International Conference on Islamic Trust Studies: Conflict and Harmony between State and Market”, 2021年12月4日(オンライン)。

(1) 研究計画と現時点での研究の状況について

計画研究「イスラームの知の変換」は、イスラームの拡大に連動する学知と情報の拡散の過程において、それらがどのように各地域において変換され、またその結果として交渉・紛争解決にいかなる役割を果たしたのかという問題について、①「イスラーム思想・学知の展開とその翻訳」②「国際商業の場における交渉・ネットワーキング」③「イスラーム法を中心とする多元的な法制度・紛争解決」の3つの論点を軸とした現地調査・文献調査を行い、これを解明するものである。とりわけ、知（情報・言語）の越境的移動とその効果・変容に焦点を当て、非イスラーム教徒との交渉およびイスラームを通じた世界のネットワーク化の過程について、理論化することを目指している。

本研究は、申請時の計画では、5年間の研究期間を以下のように2つに分けて構想していた。

I. 2020～2022 年度を「論点ごとの議論の深化」の期間と位置づけ、既述の3つの論点についてそれぞれ議論を深める。そのための資料収集として、各自が現地調査を行い、関係性やネットワークに着目する本研究では、現地語史料に限定せず、むしろ境域において対峙する側（例としてロシア、オランダなど）の公文書史料についても参照する。各論点別の研究会を開催し、調査結果を共有することを通じて、①「学知」については、非ムスリム世界との融和的な接触・共存のためのレトリック・言説②「国際商業」については、円滑な取引のための交渉・仲介システム・ネットワークの実相③「法制度」については、紛争解決の方法の事例と、それらへのイスラーム法の関与の在り方を明らかにし、それらの成果から、融和的な関係構築に何が必要なのかという点について、新たな議論を行う見通しを持っていた。

II. 2023～2024 年度は、「議論の整理と統合」の時期であり、全体の研究会を開催し3つの論点を統合したうえで、コネクティビティにつながるイスラームの知とその変化を提示・理論化する作業を行う予定であった。

本年度6月までに実際に進展した内容については、以下の3点にまとめることができる。

i) 新型コロナウイルス感染症の拡大またロシア情勢の悪化により、当初予定していた海外資料調査は、とくに2020-2021 年度についてほとんど行うことができなかった。代替手段として大型の史資料を購入（China and the Modern World: Imperial China and the West、中国ムスリム関係図書、East India Company Module など）し、それらから得られる情報を整理した。さらに海外研究協力者（Jamepeissova 氏、カザフスタン）による資料調査も試みた。本研究と連携する公募研究2件との情報交換も適宜行い、相互に補なう体制を構築した。

ii) 研究会・ワークショップの開催：他の研究班との共催により、①「学知」について、2回、②「国際商業」について、2回、③「法制度」について2回（2021 年度全体集会を含む）の研究集会を開催し、それぞれの論点にかかわる事例を検討した。特筆すべきは、ウクライナ戦争に焦点を当てた緊急シンポジウム「ウクライナ戦争の背景とその波紋：我々は今どこにいるのか」（2022 年3月25日）であり、周辺の大國（ロシア・中国）の思惑も含め、世界規模の信頼構築を考える機会を得た。

iii) 前半期の成果報告として、2022 年度に、本研究班と B02 班が中心となって第2回イスラーム信頼学国際会議“Translation and Transformation in Muslims’ Connectivity”を開催し、とくに③の論点について、高野報告がインドネシアにおけるシャリーアをも含む司法の多元性を論じ、ジャンペイソワ・野田による共同報告は、ロシア帝国末期において中国清朝との間に成立した国際紛争解決の制度における、現地（新疆・カザフスタン）のムスリムも交えた言語の変換の意義を示した。

(2) これまでの研究の成果について

これらのプロセスを踏まえ、23年度においては、人々の関係構築に欠かせない翻訳を手掛かりにして、ムスリムを中心とするコネクティビティの拡大の過程を考察するための論集（シリーズ「イスラームからつなぐ」第3巻、野田仁編『翻訳される信頼』東京大学出版会、2024年）として成果を公けにすべく、作業を進めている。この中で具体的な論点となっている本研究の成果は、①について、イスラーム社会における「完全人間」概念の伝播と翻訳の問題、中国におけるイスラームの概念の漢文テキストが持つ融和性、②について、南アジアにおけるオランダ東インド会社がかかわる商業を加速した通訳の役割、インド綿布の交易とその名称の非翻訳、③については、オスマン帝国の多言語憲法、中央アジアにおける慣習法とイスラーム法の参照による紛争解決、現代インドネシアにおける法の多元性、さらにもう一つの要素として「通訳者」(④)を加え、東南アジアにおける近代性の翻訳の問題、ロシア帝国における通訳官の役割の変化であり、それぞれの具体例とともに明示することを考えている。

以上を通じて、ここまで本研究から明らかになった点は、第一に、通商上の交渉や紛争解決における通訳者の役割の重要性である。交渉における発話の内容については、実は史料上には見えないことが多く、むしろ、通訳者の存在・媒介性そのものに焦点を当てるべきであることがわかってきた。第二に、コミュニケーションの裏の側面として、翻訳しない・そのまま訳さないことが示唆する信頼関係である。翻訳論における主要な論点の一つに翻訳不可能性の問題があるが、本研究の成果は、等価ではない翻訳の意義に光を当てるものである。第三に、翻訳が持つ二面性（広く人間関係を構築する一方、現地化・個別化につながる）である。この点については、代表者野田による「多様なひとびとをつなぐ翻訳—イスラームの各地への展開と知の伝達」（黒木英充・後藤絵美（共編著）『イスラームからつなぐ1 イスラーム信頼学へのいざない』東京大学出版会、2023年、pp.61—81）において、すでに大まかな枠組みを提示している。

連携する公募研究の進展と成果については、以下の通りである。

A：須永恵美子「「やさしいウルドゥー語」と多言語社会を巡る基礎的研究」が、パキスタンにおける言語権について検討し、幅広い世代が理解可能なウルドゥー語が、識字率の低い多言語社会に果たす役割を明らかにした。主要な成果として、成果論集「イスラームからつなぐ」第1巻への寄稿がある（「第3章 異なることばをつなぐ言語——インド洋世界におけるウルドゥー語の役割」黒木・後藤 2023, pp.83-98.）また次のような国際研究集会で、成果の発信につとめた。

Emiko Sunaga, “Immigrant Connectivity between South Asia and the Gulf: A case of Oman,” The 2021 International Conference of Korean Association for Middle East Studies with Asian Federation of Middle East Studies Associations (KAMES and AFMA), 2021年10月15日, Seoul, Korea (Online).

B：磯貝真澄「18～19世紀のロシアにおけるイスラーム法学の継承をめぐるムスリム知識層の形成」は、ロシア帝国のムスリム知識人による人名録のデータベース化の作業を通じて、そこにあらわれる人々の関係性を抽出しているが、最終年度となる2023年度において、A02・C01とも連携しつつGISの利用による情報の分析と可視化を進める予定である。この研究の進展を受けて、以下の2点の共編著を刊行している。

磯貝真澄・磯貝健一（共編）『帝国ロシアとムスリムの法』昭和堂、2022年、275頁。

磯貝真澄・帯谷知可（共編）『中央ユーラシアの女性・結婚・家庭：歴史から現在をみる』国際書院、2023年、289頁。

A03 班：移民・難民とコミュニティ形成

(1) 研究計画と現時点での研究の状況について

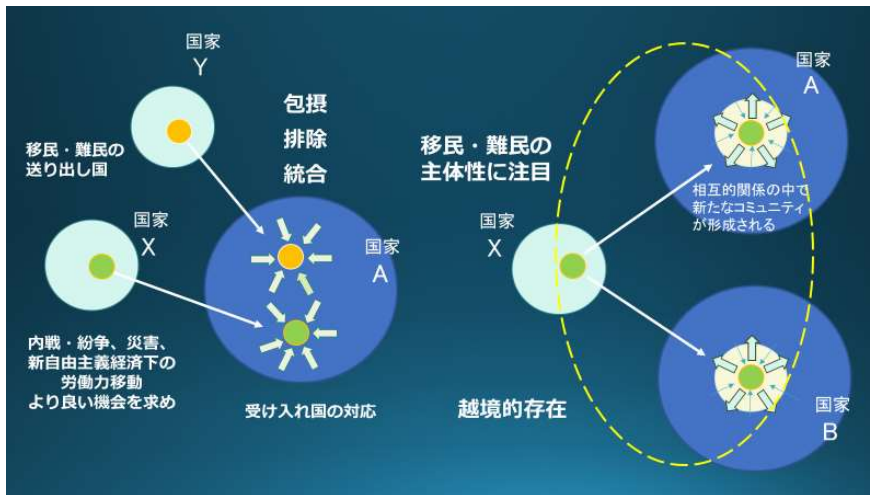
本計画研究班は、今日の世界の移民・難民問題におけるムスリムのプレゼンスの圧倒的大きさ（難民についてはパレスチナ、シリア、ロヒンギャ、アフガニスタン、イラク、ソマリア等）と、世界の人口趨勢におけるムスリム人口の増大予測（2070年頃にキリスト教を抜いて世界最大の宗教人口）を踏まえ、今後人口減・高齢化が加速する日本において、呼称はどうあれ事実上の「移民」を多数受け入れることが必至であること（すでに年金財政はそれを前提としている）、日本におけるムスリム人口比率の将来的高まりが確実であることに鑑み、以下のことを領域設定期間内に明らかにしようとする。すなわち、

- ① ムスリム移民・難民の側が受け入れ社会・国家の側に対して働きかける主体的な関係づくり(コネクティビティ)の実態を解明し、そこでいかなる形で信頼が構築されようとしているのか。
- ② 信頼構築の過程において、ムスリムのコネクティビティに宗教規範など文化的要素の関係する様態を日本、東南アジア、欧米の地域を中心に調査・研究し、**関係構築の暗黙知**を引き出すこと。
- ③ さらにこうしたコネクティビティが受け入れ社会における**個人間の関係から国際的にコミュニティ間を結ぶ次元**に、最終的には国際政治の現場にまでいかなる形で影響を及ぼし、そこでいかなる形で信頼が構築されるのかを明らかにする。

従来の移民・難民研究が、その法的枠組みと受け入れ可否をめぐる対応（包摂・排除・統合）の問題や、移民の活動による受け入れ国側の経済効果、受け入れ社会の移民・難民に対する差別・迫害といった問題が中心であったのに対し、本研究は移民・難民の主体的な関係づくりに焦点を当てることで、受け入れ国・社会のあり方を逆照射し、今後の日本社会の移民・難民受け入れに資することを旨とするものである。

上記のうち、中間評価実施時までには①と②については見通しが立ち、③に着手している段階である。

①について：ムスリム移民が信仰を守りつつ勤勉な労働により生活を確立し、「居場所」としてのモスクを各地に確保しており、そこでは出身国の国籍を問わず、ムスリムであれば等しく受け入れている。またモスクにコミュニティ・センター的機能を持たせて、ムスリムのみならず受け入れ社会の非ムスリム



住民をも巻き込んで文化的活動を展開したり（学生向け英語教室や祭礼パーティーへの招待など）、東日本大震災など災害時の被災者や大都市の生活困窮者への支援（炊き出しなど）を行ったり、COVID-19流行下に医療品を地域の病院に寄付するなどして、積極的に関係を構築している。日本人ムスリムが協力することもある。モスク開設に当たり不動産取得に苦勞することがあっても、受け入れ社会との粘り強い対

話で実現している。主体的・積極的に関係構築に向かうコネクティビティの現れである。

②について：まず前提としてムスリムの多くが移住に向かう積極性が指摘される。アラビア語で「リズク」*rizq* は、「生活の糧、日々のパン、富」を意味するが、宗教的には「神のお恵み、恩寵」の意味がある。ムスリム移民はリズクを得るための移住（「ヒジュラ」*hijra*：622年預言者のメッカからメディナへの「聖遷」と同じ語）を否定的に捉えず、むしろ神の恩寵を受けるべく、それを獲得するために積極的に移動すべきと考える。日本でムスリム移民が受け入れ社会と関係を持つ際に日本語の言葉「ご近所」を使って礼拝所周辺の路上清掃や商店街祭りに参加するが、これはアラビア語の「ジワール」*jiwar* という隣人保護規範に通じ、さらにはは正当な権利・義務関係の構築により安全（アラビア語で「アマーン」*aman*）

を保障し合うことにつながる。ムスリム移民は受け入れ国の市民として法令順守と義務遂行に励むことで、自分たちの安全と権利が保障されるべきと考える。このように、イスラームの規範や宗教的なものの考え方が、移民・難民が受け入れ社会との間で主体的な関係づくりと信頼構築に向かうことを妨げず、むしろそれを支える方向に機能していることが確認される。のみならず金銭貸借相殺を基にイスラーム初期より発展してきた現金移送を伴わない「送金」の仕組み「ハワーラ」*hawala*のように、イスラーム経済に埋め込まれたシステムも、多様な信頼関係をもとに移民・難民の移動と生活を支えてきた。

③については、移民・難民が内戦や災害に苦しむ出身国の家族・同胞を支援するような越境的活動をしていることはすでに指摘されてきたが、さらに進んでその「遠隔地ナショナリズム」的性格が、B.アンダーソンがこの概念を提唱した際に参照したユーゴスラビア内戦より以前の、第一次世界大戦期に存在していたことは、未だほとんど議論されていない。そしてこの問題を考察するために、コネクティビティと信頼構築が極めて有効な鍵概念であることを今後の研究期間にて明らかにしていく予定である。

2023年度からの沼田彩誉子の公募研究 23H03927 は、移民・難民が主体的な関係構築をいかに語るかという言説研究の新たな視角を本計画研究班にもたらしものであり、下記シリーズ第4巻にも執筆予定である。

(2) これまでの研究の成果について

2022年度までA03班には連携する公募研究がなかったため、以下、計画研究のみについて記す。

本領域全体の成果発表媒体「シリーズ イスラームからつなぐ」全8巻(東京大学出版会 2023-2025)は、共同研究成果の筆頭に数えられるが、その第1巻『イスラーム信頼学へのいざない』(黒木英充・後藤絵美編 2023年3月)には、A03班より研究代表者の黒木、研究分担者の岡井宏文、池田昭光が執筆した。領域代表者でもある黒木は、本領域全体を通貫するコネクティビティ、信頼、およびその周辺概念とイスラームとの関りを、岡井はある日本人ムスリムの足跡を辿ることで、日本の地方都市におけるムスリム移民の居場所づくりとそのコネクティビティのあり方を、池田は信頼の裏返しである「不信」概念について、逆説的ながら「不信」も社会を形成するうえで重要な役割を果たしていることを平易に論じた(A03班の研究の内容全体を収める同シリーズ第4巻『移民・難民のコネクティビティ』は2023年度内に刊行予定)。また同じく共同研究成果として、モノグラフ『ムスリム・コミュニティをつくる アキール・シディキ半生記』(子島進・岡井宏文編、Islamic Trust Studies No. 1: 東京外大 AA 研 2023年3月)を刊行したが、これは東京都内にモスクを開設したパキスタン人ムスリムが、日本への移住の経緯やモスクを中心とした人々との関係づくりの実際の詳細な語りを記録したもので、いかなる形でコネクティビティがはたらき、信頼構築がなされたかが明らかになっている。

2020年度末から2022年度途中までのCOVID-19流行期には、海外渡航・招聘への制限はむろん、同期前半には国内移動の制限もかけられ、A03班メンバーによる国内外の現地調査は大きな障害に直面した。その代わりに、上記「シリーズ イスラームからつなぐ」の企画を早くから立て、特に、歴史的にグローバルな移動を繰り返してきたタタール人移民や、近代の難民支援とイスラームとの連関を知るために有益なオスマン帝国の難民支援、現代の移民・難民の世代問題を知るためのフランスの事例、小国レバノンにおける巨大なシリア難民問題については、A03班外部に執筆者を求め、オンラインのワークショップを開催し、シリーズ第4巻の内容を固めることに注力した。一方、研究代表者は本領域の海外展開の拠点ともなるバイルートのJapan Center for Middle Eastern Studies への出張を重ね、その拠点にて関係のあったレバノンの映画監督の製作による、中東衛星放送アルジャズィーラ社のパレスチナ問題に関する良質なドキュメンタリー番組に注目した。そして同社の許諾を得たうえで、これに日本語字幕を初の外国語字幕として付し、監督を招聘して上映会を東京と京都にて開催し(2023年2月)、その映像を大学の授業にて教材として使えるようにした。このように、COVID-19状況への対応を工夫したが、今後は現地調査も積極的に行う予定である。

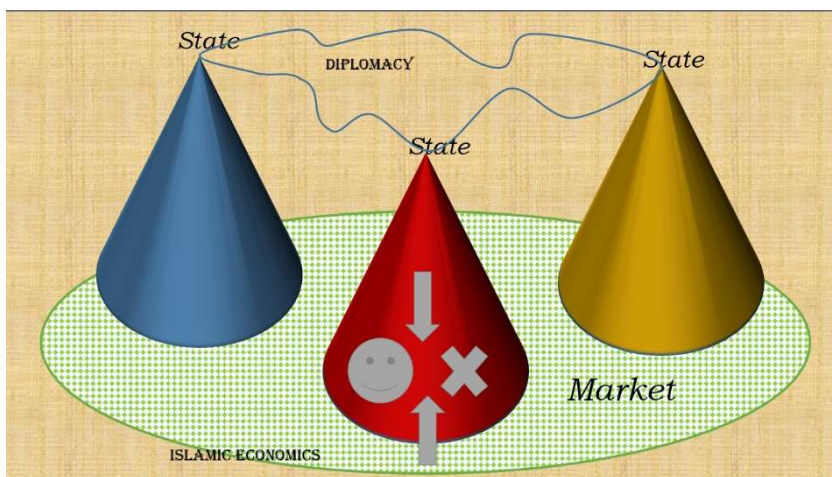
B01 班：イスラーム共同体の理念と国家体系

(1) 研究計画と現時点での研究の状況について

国家体系班の課題は、垂直的なヒエラルキーを成す国家と水平的なコネクティビティの関係を明らかにすることである。イスラームという宗教は原初的には水平的なコネクティビティによって拡大していったが、イスラーム共同体の拡大によって、統治のための支配システムや垂直的なヒエラルキーを持った国家が生まれてきた。しかも、最初は単一の国家であったものが、8世紀以降、分裂して、複数の国家が並立する事態となる。そのようななかで、水平的コネクティビティはいかに発揮されるかという問いである。

2020年のプロジェクト開始以来、オンラインを利用して、この問題についてのワークショップを開催し、メンバー間の意見交換を行い、研究を進めてきた。そのなかで、信頼構築やコネクティビティの概念を共有し、それぞれの専門に照らして、どのような議論が可能であるか探った。信頼構築は、たとえば国家がその正統性を示して臣民の信頼を得るといったような垂直方向の議論にもなりうる。しかし、本学術変革領域研究では、水平的なコネクティビティの方がより重要であり、斬新でもある。したがって、コネクティビティがいかに国家もしくは権力関係と関わるかという問題設定で研究活動を進めた。

2021年12月10日～12日にA01班とB01班が主体となって開催した第一回国際シンポジウムで提示したのは以下の図であった。



本シンポジウムの副題は「国家と市場の調和と相克」であり、国家を3つの円錐形で示し、その下に市場が敷かれている形で示した。この「市場」は「社会」にも置き換えられるものであり、いわばイスラーム的コネクティビティが最も発揮される場である。それに対して、国家は垂直方向の権力関係という異なったベクトルを持っており、市場とある場合は調和し、ある場合は衝突するという見方にたって、その調和

と相克の実相を議論するのがシンポジウムの趣旨であった。

したがって、B01班としては、①国家間の関係＝外交にコネクティビティがどう発揮されたのか、②カリフ制やイスラーム共同体など国家を越えるような枠組みをどう考えるか、および③イスラーム諸国家をコネクティビティがどのように支えたのかを中心課題として取り組むこととなった。

(2) これまでの研究の成果について

①の外交史の分野では、最も研究が盛んであるオスマン朝がヨーロッパ諸国に与えたアフドナーメ（恩恵的誓約書）を中心にワークショップを開催し、研究者を招聘して、多くの知見を得た。研究成果としてもっとも顕著なものは堀井優『近世東地中海の形成——マムルーク朝・オスマン帝国とヴェネツィア人』（名古屋大学出版会、2022年）である。二つのイスラーム国家とヴェネツィアの関係性を論じた本書は、アフドナーメ体制に関する堀井の研究の集大成というべきものであり、輝ける成果である。一方でアフドナーメはオスマン帝国のトルコ語の文書様式であるが、地中海世界の共通外交語はイタリア語であり、イタリア語でのさまざまな下交渉の結果が、最終的にアフドナーメにまとめられたことも明らかとなっ

た。つまり、両者の信頼構築の努力の結果がこの文書様式に反映されているわけであり、国家間の関係もコネクティビティをキーワードに説明できる可能性を見いだした。さらに、2023年3月3日に行われた国際ワークショップ“Trade, Diplomacy and Capitulations in the Early Modern World”には、イラン＝オランダ関係、オスマン＝イギリス関係、オスマン＝オランダ関係についての報告がそろい、オスマン＝オランダ東インド会社の関係がオランダの日本を含めたアジア諸国との関係の祖型となったのではないかという魅力的な仮説が示された。

②のカリフ制やイスラーム共同体など国家を越えるような枠組みについては、近藤信彰が「イスラームで国を作る——宗教・国家・共同体」（黒木・後藤編『イスラーム信頼学へのいざない』所収）のなかで、イスラーム史の展開を踏まえつつ論じた。アッバース朝の滅亡以降、さまざまなイスラーム国家が並立するなかで、政治単位である国家を越えるような枠組みは弱く、法学書で強調されるようなイスラーム共同体の概念は国家を規定するようなものではなく、局面によっては国家のために利用される存在に過ぎなかったことを指摘した。その点は近代においても同様であり、2023年1月12日におこなったワークショップにおいて、藤波伸嘉がオスマン帝国のカリフ制は主権国家体制や立憲君主制を前提としたものであり、国内外の政局に応じて、必要な場合に強調されるものでなかったことを指摘した。カリフやイスラーム共同体はイスラームという文明にとって普遍的かつ重要な概念であるが、歴史的な脈を無視して論じることにはあまり意味がないということが明らかとなった。

③の国家とコネクティビティの関係については、秋葉淳、真下裕之、長縄宣博がそれぞれオスマン帝国、ムガル帝国、ロシア帝国の事例に取り組み、2024年度刊行予定のイスラーム信頼学シリーズ第5巻のなかで示される予定である。

研究計画調書には、海外における資料調査や海外からの研究者の招聘による国際シンポジウムや国際ワークショップなどを毎年度行うことが記されていた。コロナ禍のため、これらの計画はオンラインによるシンポジウム、ワークショップによって代替され、資料についてもインターネットアクセスが可能なものを購入することで対処した。与えられた条件のなかではベストを尽くしたが、2022年度の後半からようやく海外調査や研究者の海外からの招聘が本格化したことは、研究計画に多少なりとも影響を与えている。残りの研究期間では、海外での調査と海外からの招聘に力を注ぎたい。

関係の公募研究としては、太田絵里奈「前近代アラビア語史料のデジタル解析による文民エリートの人的ネクサス研究」（2021~22年度）、「14~16世紀アラブ都市エリート間の名目的コネクティビティの可視化分析」（2023~24年度）が採択された。本計画班で扱っているエリートのコネクティビティに関して、デジタルヒューマニティーズ的手法を用いて、テキストエンコーディングを利用した分析や Palladio および RDF グラフを利用した可視化に取り組んでいる。中間評価時までには、デジタルテキスト化やこれらのツールを利用して行う方法論を確立することに重点がおかれ、この目標は達せられた。今後は、具体的にデータとツールを利用して、14~16世紀のアラブ・ウラマーのコネクティビティについて、名目的師弟関係も含めた関係性を明らかにする予定である。ムスリム・エリートのコネクティビティとして、ロシア帝国やオスマン帝国の事例との比較も可能となり、また、新たな方法論によってこの分野の研究を刷新することが見込まれる。

以上のように B01 班と関連する公募研究は着実に研究を進めてきた。今後は、これまで難しかった海外展開と隣接諸分野との交流を進めて、最終的な成果につなげたい。

(1) 研究計画と現時点での研究の状況について

本計画研究は、現代世界において喫緊の課題となっているムスリムをめぐる諸問題について、それぞれの地域で表面化している課題の深層にあるムスリムのコミュニティ内での関係性や、ムスリムと非ムスリムの間のコネクティビティ、あるいは国家間の関係性、さらにはムスリムの行動の基盤となる思想面での動態について明らかにすることで、ムスリムに特徴的な越境的な連帯性を検討するものである。具体的にはミャンマーのロヒンギャをめぐる問題やシリア情勢をめぐる国際社会の確執、南アジアにおける宗教間対立、日本やヨーロッパにおけるムスリム移住者あるいは婚姻等によるムスリム改宗者をめぐる課題などについて、ムスリムと非ムスリム双方の視点から考察するものである。この作業を通じて、ムスリムの宗教思想が、紛争解決のためにいかに戦略的に交錯し、信頼構築に向かっていくかを解明することが本研究の大きな目標となる。

研究を進めるにあたって、2つの課題が設定されている。①は、ムスリムが行動の規範としてどのような思想の影響を受けているかであり、②は、ムスリムの行動がイスラーム的な価値判断の下で展開されていても、そこに戦略性はないのか、という点である。

これを明らかにするために、計画研究としては、これまでに18回の研究会を主催・共催してきた。研究会は、本計画研究のみでの研究成果の公開とならず、計画研究班同士のヨコのつながりを持つように、他計画研究班との共催とすることに努め、研究分担者や研究員のみならず、内外の研究機関に属する研究者を招いての研究会を開いた。その結果、①の思想面では、ムスリムの行動指針を説く現代イスラーム思想の潮流の中で、非ムスリムとの融和的な動きが見られることが飯塚正人によって紹介され、非ムスリムとのコネクティビティにおいて戦略的な展開が見られた（飯塚正人 2022「近代西洋との対立論、「文明の衝突」論の克服を目指すイスラーム再考の思想戦略史〈序論〉」ワークショップ「現代イスラームの思想と戦略：文明間・男女間の克服に向けて」2022年6月21日開催）。

②に関してはこれら多くの研究会の結果、本研究の核となっているムスリムの「戦略性」が浮き彫りとなった。また、ミャンマーにおけるロヒンギャの動態やインドにおける少数派であるムスリムの動き（池田一人 2022「1950-60年代ミャンマーの「ロヒンギャ」に関する予備的考察：ウー・ヌ政権期のイスラームをめぐるコネクティビティの形成、その解体について」「思想と戦略に見るムスリム・コネクティビティ：ミャンマーとインドネシアの事例から」B02班研究会2022年2月12日；Ikeda Kazuto, 2022 'Becoming Rohingya in Myanmar: Ethnic Politics in the U Nu Era 1948-1962', "Translation and Transformation in Muslims' Connectivity" 国際シンポジウム 2022年11月27日）においても、多数派との軋轢の中でいかに自らの位置付けを行うことで生きていこうとしているかという戦略性が池田一人や中溝和弥によって明らかにされた。インドの事例に関しては、本計画研究班がA02班とともに開催した国際会議で招聘したロンドン大学のマリー・ラル氏とアヌプリヤ氏（Anupriya Sharma, Marie Lall 'Exploring the Strategies of Muslim NGOs to Recreate Trust and Connectivity in South Asia' "Muslim Connectivity Viewed from Thought and Strategy: Cases of Southeast Asia and South Asia", B02班研究会、2022年12月12日）やフンボルト大学のファイザ・ムハンマディーン氏（Faiza Muhammad Din, "Recreation and the creative Muslimah", 2022年11月23日講演会、東京外国語大学）のそれぞれの報告によっても指摘された。また、工藤正子は日本に住むパキスタン系移民の第1世代と第2世代その間のコネクティビティの事例を紹介、分析することで、第2世代の女性のなかに、世俗化や父親の志向する「イスラーム的生活」ではなく、自身なりのムスリムとしての生活を戦略的に選択する姿について、国際会議で報告があった（Kudo Masako 2022 'Negotiating Identity among Muslim Women with Pakistani Fathers and Japanese Mothers: An Exploration of Connectivity, Gender, and Strategic Perspectives', "Translation and Transformation in Muslims' Connectivity" 国際シンポジウム 2022年11月27日）。青山弘之はシリアやトルコでのインタビューを実施し、その解析を行った。そのなかでムスリムの戦略的思考の一端を明らかにするべく分析を行った（青山弘之 2023「トルコとシリアにおけるシリア人の統合にかかる世論調査（2022年）」単純集計報告書 CMEPS-J.net）。また、後藤絵美は、現代のムスリムの NGO 活動の事例から、ジェンダー間の問題を現代のムスリムがいかに克服しようとしているかについての戦略性に関する報告があった（後藤絵美 2022「イスラームにおける男女平等の展開」イスラーム信頼学ワークショップ「現代イスラームの思想と戦略：文明間・男女間の分断の克服に向けて」2022年6月21日；Goto Emi 2022）。さらに、研究員である藻谷悠介は、歴史的シリア地域において、非ム

スリムがいかに登用されたかについてその事例を明らかにし、ムスリム政権下における非ムスリムに対する戦略的政策が指摘された（藻谷悠介 2022 「思想と戦略に見るムスリム・コネクティビティ：歴史的シリア地域の事例から」 B02 班研究会 2022 年 9 月 29 日）。

このように、世界各地のムスリムのコネクティビティを検討する研究会を開催したことで、ムスリムの戦略性が明らかとなり、それがムスリム間のコネクティビティを強めたり、あるいは対立の要素となっていることが明らかとなった。

（2）これまでの研究の成果について

本計画研究班の成果としては、研究会とともに 2022 年 11 月に A02 班と国際会議“Translation and Transformation in Muslim’s Connectivity” を共催したことが挙げられる。これにより世界各地のムスリムをめぐるコネクティビティに関する課題が整理され、残る研究機関での「戦略性」の理解という課題を明確にできた。しかも、研究成果をまとめるシリーズ「イスラームからつなぐ」のため、この国際会議に参加していたイギリスやドイツの研究者からも原稿を提供していただいたことは、本計画研究の国際的な広がり結び付くこととなった。研究会や国際会議での報告は、「戦略性」という課題を明示し、各分担者がムスリムのコネクティビティにおける戦略性を中心に成果を挙げることを目標とすることができた。さらにシリーズの第 1 巻『イスラーム信頼学へのいざない』では、本計画研究班が研究している「ムスリムの思想と戦略性」について、山根聡が一般向けに書き下ろした（山根 2023）。

研究会以外にも、セミナー等も開催したが、特に 2021 年 8 月のアフガニスタンにおけるターリバーン政権樹立時にはその背景についての関心が高まり、ウェビナー等を 3 回開催したが、毎回 100 名以上、最大時には 300 名以上の参加があった。こうした計画研究に関連し、関心の高いテーマについては今後も研究会やウェビナーを開催する予定である。

また、本計画研究と連携する公募研究「イスラーム諸国の信頼醸成と合意形成」は、現代イスラーム世界における人権規範の形成・創出に着目し、イスラーム法学者たち（ウラマー）の国際的なネットワークの実態を解明することを目指す。すなわち、「人権」概念をイスラーム法学の立場から再解釈する営みに着目し、ウラマーの著作物や、ウラマーで構成される国際組織の決議等文書を一次資料として、彼らのネットワークと規範形成がイスラーム諸国間及びイスラーム世界内外における信頼醸成プロセスにどのように寄与しているのかを明らかにすることを具体的な目標とする。

この公募研究は 2023 年度より開始したばかりであるため、中間評価時までの短期目標を設定することなく、領域設定期間内の具体的な目標を以下のように設定している。まず国際機関に関与するウラマーについてはその出身地・出身大学・所属学派ごとにリスト化し、国際的なネットワークの可視化を試みる。機関の決議、広報誌、ホームページなどから人権に関係する会議がいつ、どこで、どのメンバーによって行われたかについてリスト化し、人権概念の再解釈の動態を解明する。次に、イスラーム協力機構（OIC）会議の決議等文書と、その前段階で予備的に開催されるウラマー組織の合意文書を一次資料として、ウラマーネットワークと国際政治の関係に着目する。国連にイスラーム諸国が提案した決議、OIC 会議の決議、それに先立つウラマーによる国際会議の合意文書を解析し、規範的な関連の有無を明らかにする。2023 年度 4 月の研究開始から中間評価実施時までに、まず一次資料や先行研究の収集を進めた。アラビア語で出版された「人権」をテーマとする出版物の一部は既に収集済みである。また、ウラマーが関与する国際機関のうち、人権規範について扱う国際組織を研究対象とする予定であるが、その一部には既にインタビューを実施しており、さらなる関係構築を進めている。

山根聡 2021 「ターリバーンの 25 年」 B02 班研究会 「ターリバーン政権復活をめぐる利益と不利益」 2021 年 8 月 20 日

山根聡 2021 「緊急ウェビナー「緊迫するアフガニスタン情勢」 2021 年 8 月 26 日

山根聡 2021 「9.11 がもたらしたパキスタンの社会変容と南アジア域内関係の流動化」 2021 年 9 月 11 日

山根聡 2023 「信頼のためのイスラーム思想と戦略」 黒木英充・後藤絵美編『イスラームからつなぐ イスラーム信頼学へのいざない』 東京大学出版会

(1) 研究計画と現時点での研究の状況について

本研究は、紛争影響地域において形成される信頼・不信、およびコネクティビティ・分断の諸相を、地域研究や人類学など現場に立脚した実証的研究に基づいて明らかにするものである。これまでの研究活動から、暴力の影で不可視とされてきた対立する勢力の「あいだ」(高橋源一郎・辻信一『「あいだ」の思想 セパレーションからリレーションへ』2021)に注目し、そこを行き交う媒介者の存在が対立勢力間の関係をどのように再編するかを分析対象とすることの重要性が浮かび上がってきた。2024年度にその成果を「シリーズ イスラームからつなぐ」第7巻として出版することに向けて、以下の4つのテーマに分けてそれぞれが研究を進めてきた。

2022年度にはミンダナオ島で海外合同調査を実施し、2017年に発生したマラウィ市街戦に関する調査をミンダナオ国立大学マラウィ校に委託した。ISに忠誠を誓うグループに対する暴力的な解決が、コミュニティ間、コミュニティと地方・中央政府、および解放戦線との「あいだ」をどのように再編したかについて、2023年度にA03班と共催する国際シンポジウム「Exploring the Tacit Knowledge of Trust Building and Connectivity amidst Predicaments (仮)」(2024年3月1~3日、於：東京)で議論する予定である。

社会的要請に応える主な活動としては、2021年度8月のアフガニスタン政変を受けて、緊急講演会「ターリバーン政権復活をめぐる利益と不利益」(2021年8月20日)を共催し、300人を超えるオンライン視聴者に対して状況を解説した。2023年度4月には、スーダンで始まった武力衝突を受けて、緊急講演会「スーダンの軍事衝突—現状、背景、見通し」(2023年4月27日)を開催し、約200人のオンライン視聴者に対して専門的な観点からの情報提供を行った。

①外部とのつながりと信頼

- 小副川琢 : シリア内戦およびレバノン内戦における和平努力の比較—外部勢力の関与と信頼醸成
- 日下部尚徳 : バングラデシュにおけるロヒンギャ難民の受容と拒絶—信頼と不信のコネクティビティ
- 佐原徹哉 : 移民・難民のバルカン・ルートについて

②ムスリムと非ムスリムのつながりと分断

- 飛内悠子 : 南北スーダン間の「軍」同士の関係を通してみる紛争と平和構築
- 武内進一 : 「宗教戦争」の条件—中央アフリカ共和国の事例から考える
- 熊倉潤 : 新疆ウイグル自治区における政府と民衆—信頼あるいは不信の観点から

③多元的な信頼、錯綜する猜疑

- 鈴木啓之 : 紛争下で取り結ぶ人間関係—パレスチナ人と他者
- 山本沙希 (PDフェロー) : 内戦を経て築かれる「つながり」—アルジェリア女性の経験から
- 富樫耕介 (研究協力者) : 紛争後の権威主義体制の「正統性」と「信頼性」—チェチェン住民の視点からの考察

④異なるイデオロギー間の対話のゆくえ

- 見市建 : インドネシアにおけるイスラーム主義武装闘争派・非戦闘員の社会復帰
- 石井正子 : ISとの闘いのゆくえ—フィリピン南部

(2) これまでの研究の成果について

これらのテーマは、上述の国際シンポジウムにおいて議論し、理論化を試みる。以下ではそれぞれのテーマについて検証し、成果として発表してきたことを述べる。

①に関する現象としては、未曾有の数の難民が発生するなか、国際人権レジームが後退し、難民を隔離して長期一時滞在者として放置せざるをえない状況が受け入れ国で発生している。しかし、厳しい国境管理や入管政策にも関わらず、国境を超える人びとは後を絶たない。このようななか、密航を手助けする仲介者は犯罪者と見なされがちだが、近年ではプロの仲介業者に加えて、国境を超えた経済活動に伴う往来ゆえに、「つながり」をもつようになった人びとが関わることもある。彼らの行為は従来の経済活動に紛れて行われるため見えにくく、監視の対象にもなりにくい。彼ら自身も「犯罪」に手を貸しているという意識は低い。金銭的支援に関しても、非公式だが非合法ではない慣習的な送金方法が活性化されている。難民越境支援の実態は、国家の国際人権レジームからの後退と合わせて考察する必要がある（日下部 2020 「コロナ禍のバングラデシュ—貧困・児童労働・難民」；佐原 2023 年 4 月 7 日報告「難民・移民のバルカン・ルート、押し戻しとその背景」A03 班・B03 班共催ワークショップ）。また大国の干渉を受けやすい紛争影響地域に対する外部勢力の関わりが、政策決定者の和平プロセスへの信頼・不信の醸成に与える影響を「浸透国家（penetrate state）」という概念から捉える試みも議論された（小副川 2021 「安全保障—『全方位提携論』とレバノン」）。

②については、ムスリムまたは非ムスリムがマジョリティである国家において、国政に参加するマイノリティの政治家や官僚の両義的存在が議論となった。彼らは両者から信頼を得て、その関係性を取り結ぶ役割を担っている。一方、政治情勢の成り行きによっては、信頼が不信に容易に転じるリスクがあり、微妙なかじ取りが求められる（飛内 2021 「難民支援と信仰を基盤とした組織」；熊倉 2022 『新疆ウイグル自治区—中国共産党支配の 70 年』）。中央アフリカのムスリム・非ムスリム間の対立が顕在化した地域では、国家権力の構成の変化と、暴力の広がりの中、さまざまな属性なかで宗教の違いが対立する陣営を分けるシンボルとして機能した。宗教をシンボルとした対立軸の形成された方が議論された（武内 2022 「中部アフリカ—ポストコロニアル国家の生成史」）。

③については、長期にわたる紛争を経験してきた人びとが他者と織り成す信頼と猜疑が議論された。難民や無国籍者、戦時下の市民として突然他者と関係を取り結ばざるをえない状況に、紛争下の人びとはどのように対処してきたのだろうか。紛争が小康状態になった社会、および紛争後の社会において形成される「つながり」の位相、体制側の統治の「正統性」に対する一筋縄ではない面従腹背など、紛争影響社会で示される信頼と猜疑の重層性が検討された（熊倉潤 2022. 『新疆ウイグル自治区』）。個人に焦点を当てることによって見えてくる、味方と敵の分断線を横断したり、かくしたり、操作したりして、他者との「あいだ」に存在する共在を可能にする生活世界にも光が当てられた（鈴木 2023 年 3 月 2 日報告「紛争下での信頼と猜疑—パレスチナ人と「他者」が織り成す関係性」イスラーム信頼学全体集会）。

④については、主に「テロ」がイスラームと結びつけられる言説が広がるなかで、急進的なイデオロギーの支持者と接点をもつ人びとに注目し、不信の輪が広がらないように対話を行う彼らの活動を調査した（石井 2023 「『テロリスト』に対する軍事的解決と信頼のゆくえ」）。武装闘争派の社会復帰や脱過激化プログラムを概観し、異なるイデオロギー間の対話と信頼の再構築を検証する作業も進められている（Miichi 2023 *Indigenizing Islamism in Indonesia: Prosperous Justice Party's Approaches Towards Traditionalist Muslims*）。

C01 班：デジタルヒューマニティーズ的手法によるコネクティビティ分析

(1) 研究計画と現時点での研究の状況について

本研究は、領域のキーワードである「コネクティビティ」・「信頼関係」の可視化分析を目標とし、ムスリムが取り結ぶ様々な社会関係を可視化し、その様態の特徴、またそうした特徴の地域的な越境性や時代的な変化を追究する。その際、各分担者が専門とする地域・時代における人名録を主たる史料として、昨今のデジタル人文学の動向に即した可視化分析の方法を提示する。

本研究における作業は次の3点に整理される。第1に、デジタル人文学の動向に対応した分析手法の開拓、第2に、人名録の中にあられる集団や個人が織りなす関係性の解明、第3に、広範な空間を対象とした「コネクティビティ」・「信頼関係」の分析とそこにおける多様性・多義性・共通性の解明である。

本研究の申請時に設定した計画では、表1の通り、第1段階と第2段階に分けて進めることとしている。これまでの研究の進展状況について述べると、研究計画の執筆段階では想定し得なかった COVID-19 の世界的流行とその長期

	期間	目標
第一段階	令和2年度～令和4年度前半	作業1・2：研究手法の検討 □ 分析指標の設定 □ ネットワーク分析手法の開拓 □ デジタル人文学的手法の開拓
第二段階	令和4年度後半～最終年度	作業3：可視化分析と批判的検証 □ 試行錯誤を通じた分析手法の確立 □ 分析およびモデル化

化により、計画していた海外の研究者との研究交流がオンラインに留まったことや、デジタル化のための機材の納品が遅延したことを除けば、比較的順調と言える。

各段階において具体的に行ったことは次の通りである。研究手法の検討を目標に掲げる第1段階においては、研究分担者および研究協力者が分析対象とするテキスト・その時代的背景・テキスト作成者の意図・テキストから抽出する社会関係・その指標を共有した。その上で、分析手法についての議論を行い、各テキストや目的に即した分析手法を提示した。これを踏まえ、昨年度後半より第2段階に入り、現在、各自のテキストに対し、第1段階で提示された手法を用いて分析を進めている。

研究の進め方としては、毎週1、2回の頻度で開催されるオンライン勉強会、不定期で開催されるワークショップとセミナーを通じて進捗状況の共有と方法論の見直しについて議論している。ワークショップについては言うまでもないが、オンライン勉強会やデジタル人文学的手法の習得を目的とするセミナーには若手研究者も参加しており、若手研究者養成の機能も果たしていると言えよう。特に、令和3年度の夏には、デジタル人文学の手法の習得を目指すハンズオンセミナーDigital Humanities Summer Days 2021を開催し、オンラインで領域内外から多くの参加者を集めた。このセミナーでは全4回にわたり、デジタル人文学的手法の習得を目指した。具体的には、手書きテキストの文字認識エンジン Transkribus の活用、GIS (Geographic Information System)、RDF (Resource Description Framework)、TEI (Text Encoding Initiative) である。さらに、令和4年度には、ネットワーク分析のための可視化の手法を扱うセミナーも開催した。これらのセミナーを通じ、参加者は手法の習得だけでなく、それを自身の研究にどのように活用できるかについてまで思考し、議論した。令和4年度後半以降は、研究領域で出版を進めるシリーズ「イスラームからつなぐ」担当巻の執筆を見据え、勉強会を活用しながら、第1段階で習得した手法を自身の研究に実践的に応用する段階に入っている。最終年度に向けて、特に、異なる地域や時代における「コネクティビティ」や「信頼関係」のあり方の比較検討が焦点となると考える。そのためには、令和5年度に各人で着実に分析を進める必要がある。

令和3年度から開始された公募研究として、「計量テキスト分析とネットワーク分析をもちいたイスラーム主義組織の政治動員の研究」(21H05378; 研究代表者：山尾大)がある。同公募研究は、近代以前の歴史的史料に基づいた分析に偏る計画研究に現代的な視点を加える意味で重要である。また手法においても、計画研究がマークアップの手法を重視するのに対し、同公募研究は計量テキスト分析の手法を用い、デジタル人文学的手法の開拓という点においても補完的役割を果たす。

(2) これまでの研究の成果について

ここでは、第1段階での成果を中心に述べる。まず、本研究はデジタル人文学の領域において次の成果を残したと言える。第1に、アラビア語やペルシア語などのアラビア文字系統の言語で書かれたテキストのデジタル化の手法の提示である。アラビア文字は右から左へ記述される。これまでのデジタル人文学の領域は、ラテン文字など左から右に向けて書かれる文字を基本として発展してきた傾向がある。そのため、アラビア文字系統の言語については、デジタルテキスト化という基礎的な作業においてもその方法や環境が整備されていない状況であった。そこで、デジタルテキストを作成するためのノウハウを整理した (Ishida & Shinoda, “A Study on the Accuracy of Low-cost User-friendly OCR Systems for Arabic”)

第2に、可視化分析の手法について最新の動向をおさえつつ課題を整理した (熊倉「見えないつながりを描き出す」)。特に、テキスト分析におけるエンコーディング手法の開拓は重要課題として位置づけた。テキスト分析の手法として普及している TEI は XML に基づく。XML は左から右に向けて書かれる文字を想定して設計されているため、アラビア文字系統の言語をマークアップすると語順が入れ替わるなどの不具合が生じる。これに対し、アラビア文字系統のためのマークダウン方式 (mARkdown) の開発が現在進められている。この2つの手法をそれぞれ検証し、可能性と課題について整理した (熊倉「15世紀人名録『輝ける光』デジタルテキスト作成の試み」)。また、関係性の可視化手法については、RDF を用いた実践 (太田「15世紀ウラマーの名目的師弟関係にみる“信頼”」、Gephi や Palladio といったネットワークを可視化するためのソフトウェアを用いた実践 (Kumakura & Sunaga, “Visualizing Academic Networks and Trends through Acknowledgements”）、GIS を用いた実践 (Fukami, Naoko, Sato, Susumu et al., “Morphological Analysis of Nineteenth-century Cairo”) を通じて、その有用性を検証した。

第3に、人名録というテキストの位置づけや、そこから抽出されるネットワークが現実の関係性をどの程度まで反映するかについて検討した (新井「南アラビア・ハドラマウト出身者の伝記集」)。さらに、この作業を通じて、関係性を抽出するためにどのような指標を設定することが可能であるかを追究した。例えば、学統を分析する指標として、師から弟子に渡される免状 (イジャーザ) に関する記述があげられる。免状授与の記録を辿っていけば、師弟関係を復元することが可能である。ところが、15世紀エジプトの人名録の中には、従来、1対1の関係で授与されるのが一般的であった免状が、同一の師から多数の弟子に対して授与される事例が多数見られることが明らかとなった。このような事例の特徴は、師と弟子の間に直接的な面識がないことが多いことや、免状が仲介者となる人物を介してやりとりされることである。名目的な師弟関係とも捉えられるこの関係性を従来型の師弟関係と同列に扱うことは難しい。さらには、免状の仲介者となる人物はクライアントである「弟子」にとっては重要なコネクションであることなどが議論された (太田「15世紀ウラマーの名目的師弟関係」)。このことは、一方では、ある指標を設定し、それを機械的に抽出して分析することの危険性を示唆する。他方では、機械的に抽出して分析するための指標を検討したことにより、名目的な関係性や仲介者の存在に気づいたのであり、この点については大きな成果であったと言える。

本研究は歴史資料の中の関係性を可視化分析しようとするものであるが、これを通じて開拓される手法は必ずしも歴史研究に限定されるものではない。Kumakura & Sunaga, “Visualizing Academic Networks and Trends through Acknowledgements”では、現代の博士論文を対象として、そのあとがきに述べられる謝辞から被謝辞者の情報を抽出し、著者と被謝辞者間のネットワーク分析を試みた。これにより、テキストから抽出された情報を基にしたネットワーク図はある程度現実の関係性を反映していると言える結論づけた。同時に、このことは、人名録の性格を踏まえて分析をすれば、当時の関係性を抽出し分析することは十分可能であることを示唆すると言える。

また、紛争後の国家建設のプロセスにおいて紛争の再発や政治社会的不安定につながる要因を明らかにした山尾の研究は、Twitter という SNS 上のテキストが人々の認識を捉える際の有用なデータとなりうることやその手法の可能性を提示するものである (山尾「英雄か脅威か? 計量テキスト分析からみるイラクの世論と街頭行動の拡大」)。

7 研究発表の状況

研究項目ごとに計画研究・公募研究の順で、本研究領域により得られた研究成果の発表の状況（主な雑誌論文、学会発表、書籍、産業財産権、主催シンポジウム等の状況。令和5年6月末までに掲載等が確定しているものに限る。）について、具体的かつ簡潔に5頁以内で記述すること。なお、雑誌論文の記述に当たっては、新しいものから順に発表年次をさかのぼり、研究代表者（発表当時、以下同様。）には二重下線、研究分担者には一重下線、corresponding author には左に*印を付すこと。

研究項目 A（人の高い移動性を前提にしたコネクティビティに取り組む）

A01 班

平野美佐「利子に埋め込まれた信頼——沖縄の模合（頼母子講）から考える」『イスラーム信頼学ニューズレター』3、20-21頁、2023年。

長岡慎介「未来をひらくイスラーム経済のつなぐ力——その思想と歴史から学ぶ」黒木英充・後藤絵美編『イスラーム信頼学へのいざない（イスラームからつなぐ1）』東京大学出版会、99-114頁、2023年。

Daisuke Igarashi “*Waqf as a Means of Securing Financial Assets: The “Self-Benefiting Waqf,”* In Amalia Levanoni (ed.), *Egypt and Syria under Mamluk Rule: Political, Social and Cultural Aspects* (Islamic History and Civilization vol. 181), Leiden: Brill, 2022, pp. 277–291.

Shin Yasuda “Islamic Tourism: Development of Islamic Finance as a Market Philosophy,” *Journal of Islamic Tourism* 1, 2021, pp. 64-78.

Nagaoka, Shinsuke “Toward a Comparative Analysis of 'Mobility' in Economic Institutions: An Inquiry from Islamic Economic Studies.” Presented at the International Colloquium on Islamic and Halal Economic Studies: Towards New Horizons in the Post-Covid Era, 2023年3月4日、於：立命館大学。

Nagaoka, Shinsuke “Mobility in the Islamic Economy: Its Potential for Application in Post-Capitalist Society.” Presented at the 11th International Symposium on Islamic Civilization and Science (ISICAS 2021)、2021年10月28日（オンライン）。

A01 班と連携する公募研究

Khashan, Ammar “Gold Dinar, Cryptocurrency, and Waqf Crowdfunding: Reflections on Trustability of Fintech Tools from an Islamic Legal Perspective.” Presented at the 1st International Conference on Islamic Trust Studies: Conflict and Harmony between State and Market”, 2021年12月4日（オンライン）。

ハシヤン・アンマール『イスラーム経済の原像——ムハンマド時代の法規定形成から現代の革新まで——』ナカニシヤ出版、2022年2月、232頁。

A02 班

中西竜也「「聖」なる賽典赤とムスリム・アイデンティティ：清代中国の預言者一族の対外生存戦略と内的緊張関係」『東洋文化』103, 2023, pp. 183-203.

野田仁「多様なひとびとをつなぐ翻訳——イスラームの各地への展開と知の伝達」黒木英充・後藤絵美（共編著）『イスラームからつなぐ1 イスラーム信頼学へのいざない』東京大学出版会、2023年、pp. 61–81.

嘉藤慎作「ムガル朝港市スーラトの船主商人：1685年マラバール海岸への通航をめぐるオランダ東インド会社との係争を中心に」『西南アジア研究』94, 2022.6, pp. 36-58.

高野さやか, 中空萌 『『法の生成』の人類学に向けて』『文化人類学』86(1), 2021, pp.127-138.

Zhanar Jampeissova, Jin Noda, “Translated ‘Legal’ Code: Difference of Understanding the Law between Kazakh Nomads and Russian Colonial Officials,” International Conference on Islamic Trust Studies: Translation and Transformation in Muslims’ Connectivity, 2022年11月26日、大阪大学箕面キャンパス（オンライン）。

Sayaka Takano, “Legal Pluralism and Connectivity in Indonesia” International Conference on Islamic Trust Studies: Translation and Transformation in Muslims’ Connectivity, 同上。

Yuji Tsuboi, “Jawi Publication and its Connectivity in the Process of Decolonization in Southeast Asia,” 12th Malaysian Studies Conference, 2021年8月、オンライン。

Mami Hamamoto, “The Russian Empire’s Penetration into the Xinjiang Market in the Late 18th and 19th Centuries,” 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウム「不確実性の時代のスラブ・ユーラシア研究：対話と再検討」2021年7月, オンライン.

野田仁 (編)『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2023, 244 頁.

A02 班と連携する公募研究

須永恵美子「第3章 異なることばをつなぐ言語——インド洋世界におけるウルドゥー語の役割」黒木・後藤 2023, pp. 83–98.

Emiko Sunaga, “Immigrant Connectivity between South Asia and the Gulf: A case of Oman,” The 2021 International Conference of Korean Association for Middle East Studies with Asian Federation of Middle East Studies Associations (KAMES and AFMA), 2021年10月15日, Seoul, Korea (Online).

磯貝真澄・帯谷知可 (共編)『中央ユーラシアの女性・結婚・家庭：歴史から現在をみる』国際書院, 2023年, 289 頁.

磯貝真澄・磯貝健一 (共編)『帝国ロシアとムスリムの法』昭和堂, 2022年, 275 頁.

A03 班

Mari Tamura, Hitomu Kotani, Yusuke Katsura, Hirofumi Okai “Mosque as a COVID-19 vaccination site in collaboration with a private clinic: A short report from Osaka, Japan,” *Progress in Disaster Science* 16, 2022. 12.

長有紀枝「さらなる難民危機と国際社会」『国際問題』709, 2022年10月, pp. 37-49.

昔農英明「「人道的統治」と難民の階層化：ドイツと日本の比較から」『難民研究ジャーナル』11, 2022, pp. 35-49.

Hitomu Kotani, Mari Tamura, Susumu Nejima, “Mosques in Japan responding to COVID-19 pandemic: Infection prevention and support provision,” *International Journal of Disaster Risk Reduction* 69, 2022.

Hidemitsu Kuroki, “Dragomanity: Multiple Belonging and Survival Strategy of Non-Muslim Interpreters in Ottoman Aleppo,” In Yohei Kondo (ed.), *Survival Strategies of Minorities in the Middle East: Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies*, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 2021, pp. 43–64.

Nakano, S. & Tanaka, T. “The Relationship between Religiosity and Receptive Attitude towards Muslims among Japanese Students.” The 10th Asian Conference on Psychology & Behavioral Sciences. 2022. 3.

子島進, 岡井宏文 (編)『ムスリム・コミュニティをつくる：アキール・シディキ半生記』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2023, 106 頁.

長有紀枝 (編著)『スレブレニツァ・ジェノサイド：25年目の教訓と課題』東信堂, 2020年, 264 頁.

主催イベント

Al Jazeera ドキュメンタリー『教科書のナクバ』日本語字幕完成記念上映会＋トーク、2023年2月5日 (東京大学駒場キャンパス)・11日 (京都大学吉田南キャンパス) (東京会場主催：A03 班、京都会場：他科研との共催) 東京会場内容：ドキュメンタリー「教科書のナクバ」上映、ムハンマド・エルアルビード氏 (構想企画担当) による講演、レーン・ミトリー氏 (監督)、ムハンマド・エルアルビード氏への Q&A

シビルダイアログ講演会「新居浜にみる多文化共生：濱中彰さんの思いをつなぐ」新居浜市総合福祉センター (愛媛県新居浜市) 2022年12月18日、講師：徳田剛「地方部での外国人受け入れの現状と課題：新居浜市の場合」・岡井宏文「世界でつながる、地域でつなげる：濱中彰さんの足跡から多文化共生を考える」

研究項目 B (コネクティビティを踏まえたうえでの信頼構築の問題に取り組む)

B01 班

Norihiro Naganawa “Officious Aliens: Tatars’ Involvement in the Central Asian Revolution, 1919-1921,” *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History* 24, 2023, pp.63-92.

馬場多聞 「13 世紀のラスール朝の宮廷料理」『史林』106, 2023, pp.44-72.

Nobuaki Kondo “Conditional Sales and Other Types of Loans in Qajar Iran.” *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 64, 2021, pp.615–639.

沖祐太郎 「ダール・イスラーム/ダール・ハルブをめぐる議論の国際法学における意義」『世界法年報』40, 2021, pp. 77-102.

Jun Akiba, “Muallimhane-i Nüvvab'dan Mekteb-i Kuzat'a: Osmanlı Kadı Okulunun Yarım Yüzyıllık Serüveni” in Ahmet Hamdi Furat ed. *Zeytinburnu Belediyesi Kültür Yayınları Sahn-ı Semân'dan Dârülfünûn'a: XIX. Yüzyıl Osmanlı'da İlim ve Fikir Dünyası: Âlimler, Müesseseler ve Fikrî Eserler, XIX. Yüzyıl*, 2021, pp. 13-29.

Norihiro Naganawa “Vicious Alliance? Russia and Saudi Arabia in a Shifting World” Davis Center for Russian and Eurasian Studies, Harvard University, 2022 年 11 月 17 日, Harvard University.

Nobuaki Kondo “The Safavid Views on Diplomacy and International Relations,” Institut Orientalistik, Bamberg University, 2022 年 11 月 16 日, Bamberg University.

Norihiro Naganawa “Muslim Soldiers in the Tsar’s Army” at the Roundtable “The Imperial, Soviet, and Post-Soviet Soldier: A Roundtable in Honor of Mark von Hagen II,” 53rd ASEEES Annual Convention, 2021 年 12 月 1 日, オンライン.

Jun Akiba “Muallimhane-i Nüvvab (1855-1924): Son Dönem Osmanlı Eğitiminde bir Medrese-Mektep Sentezi,” İSAMER Merkez Konuşmaları, Bahar 2021-11, İstanbul Üniversitesi, 2021 年 6 月 9 日.

黛秋津 「冷戦後東欧地域における紛争と暴力の歴史的背景：ユーゴスラヴィアとウクライナ」伊達聖伸・藤岡俊博編『「暴力」から読み解く現代世界』東京：東京大学出版会, 2022, pp. 129-143.

堀井優 『近世東地中海の形成：マムルーク朝・オスマン帝国とヴェネツィア人』名古屋：名古屋大学出版会, 2022 年, 240 頁.

小林功・馬場多聞編『地中海世界の中世史』東京：ミネルヴァ書房, 2021, 212 頁.

B01 班と連携する公募研究

太田(塚田) 絵里奈 「15 世紀ウラマーの名目的師弟関係にみる“信頼”：RDF グラフを用いた可視化分析」イスラーム信頼学ワークショップ「信頼を可視化する」2023 年 1 月 7 日 (オンライン) .

B02 班

So Yamane “On the Idea of Symbiosis in the Poetry of Bulleh Shah, an 18th Century Punjabi Sufi Poet,” *ORIENT Journal of the Society for Nera Eastern Studies in Japan* 58, 2023, pp. 91-102.

Masako Kudo “Negotiating Citizenship and Reforging Muslim Identities: The Case of Young Women of Japanese-Pakistani Parentage.” *Citizenship Studies* 25(7), 2021, pp. 993-1010.

Kazuya Nakamizo “The Politics of Obedience: The BJP System and the 2020 Bihar State Assembly Election”, *Asian Studies* 67 (2), 2021, pp. 40-57.

Yumi Sugawara “New Religion and State Strategies: Saints and Sultans in the Babad Tanah Jawi,” Research Group Reunion Conference “New Directions in the Study of Javanese Literature” The Hebrew University of Jerusalem, Israel, 2022 年 11 月 9 日, The Hebrew University of Jerusalem, Israel.

Emi Goto “Theology of Actress: Hijab, Feminism, and Islam in Egypt,” Workshop for Women's Pathways to Professionalization in Muslim Asia: Reconfiguring Religious Knowledge, Gender, and Connectivity Institute of

Asian and African Studies (IAAW) Humboldt-Universität zu Berlin, 2022 年 6 月 30 日, Humboldt-Universität zu Berlin.

工藤正子「国際結婚の子どもたちの越境とアイデンティティ形成：日本人の母とパキスタン人の父をもつ若者たちの事例から」第 55 回日本文化人類学会, 2021 年 5 月 30 日, オンライン.

山根聡「伊克巴勒的倫敦」(イクパールのロンドン) 臺灣商務印書館, 2022.

Yumi Sugahara (ed) *Comparative Study of Southeast Asian Kitabs (6): Paradise and Hell*. SIAS Working paper series 34. Tokyo: Center for Islamic Studies, Sophia University, 2021, 122+vi pages.

青山弘之『膠着するシリア：トランプ政権は何をもたらしたか』東京：東京外国語大学出版会, 2021 年, 274 頁.

Minoru Mio, Kazuya Nakamizo, Tatsuro Fujikura (eds.), *The Dynamics of Conflict and Peace in Contemporary South Asia: The State, Democracy and Social Movements*, London: Routledge, 2020, 216 pages.

主催イベント 緊急講演会「ターリバーン政権復活をめぐる利益と不利益」(共催：A03 ほか) 2021/8/20、オンライン、山根聡「ターリバーンの 25 年」・田中浩一郎(慶應義塾大学)「ターリバーン政権復活をめぐる利益と不利益」

B03 班

Miichi, Ken. 2023. "Indigenizing Islamism in Indonesia: Prosperous Justice Party's Approaches Towards Traditionalist Muslims," *Politics, Religion and Ideology* 24(1), pp.120-133.

石井正子. 2023. 「『テロリスト』に対する軍事的解決と信頼のゆくえ—フィリピンからの問い」黒木英充・後藤絵美編『イスラームからつなぐ 1 イスラーム信頼学へのいざない』東京大学出版会, 215-232.

武内進一. 2022. 「中部アフリカ—ポストコロニアル国家の生成史」永原陽子(編)『岩波講座世界歴史 18 アフリカ諸地域—20 世紀』岩波書店, 175-197.

小副川琢. 2021. 「安全保障—『全方位提携論』とレバノン」末近浩太(編)『シリア・レバノン・イラク・イラン』ミネルヴァ書房, 145-165.

飛内悠子. 2021. 「難民支援と信仰を基盤とした組織—北部ウガンダにおけるクク人とスクリプチャー・ユニオン」『難民研究ジャーナル』(10): 117-131.

日下部尚徳. 2020. 「コロナ禍のバングラデシュ—貧困・児童労働・難民」宇佐見耕一・岡伸一・金子光一・小谷眞男・後藤玲子・原島博編『世界の社会福祉年鑑 2020 (2021 年度版) 感染症と社会福祉』旬報社, 237-245.

佐原徹哉. 2023. 報告「難民・移民のバルカン・ルート、押し戻しとその背景」A03 班・B03 班共催ワークショップ, 2023 年 4 月 7 日 (於：明治大学)

鈴木啓之. 2023. 報告「紛争下での信頼と猜疑—パレスチナ人と「他者」が織り成す関係性」2022 年度イスラーム信頼学全体集会「対立と紛争のなかで、つなぐ」, 2023 年 3 月 2 日 (於：東京外国語大学)

熊倉潤『新疆ウイグル自治区：中国共産党支配の 70 年』中央公論新社, 2022, 272 頁.

主催イベント 公開シンポジウム エイナット・ヴァイツマン(劇作家、俳優、人権活動家)など「演劇と抵抗：48/イスラエルでパレスチナ人のナラティブを表現する取り組み」(共催：立教大学異文化コミュニケーション学部), 2023 年 2 月 18 日 (於：立教大学).

研究項目 C (ネットワークを可視化する挑戦的な課題に取り組む)

C01 班

熊倉和歌子, 2023. 「見えないつながりを描き出す：デジタル人文学の可能性」『イスラームからつなぐ 1 イスラーム信頼学へのいざない』東京大学出版会.

新井和広, 2021. 「南アラビア・ハドラマウト出身者の伝記集：学者・スーフィーの移動や知識伝達分析の準備作業として」『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』36, 77-105.

Ishida Yuri & Shinoda Tomoaki, 2021ab. “A Study on the Accuracy of Low-cost User-friendly OCR Systems for Arabic: Part 1&2.” The Digital Orientalist. URL: <https://digitalorientalist.com/2021/09/17/a-study-on-the-accuracy-of-low-cost-user-friendly-ocr-systems-for-arabic-part-1/>, <https://digitalorientalist.com/2021/09/24/a-study-on-the-accuracy-of-low-cost-user-friendly-ocr-systems-for-arabic-part-2/>.

太田絵里奈, 2023. 「15 世紀ウラマーの名目的師弟関係にみる“信頼”：RDF グラフを用いた可視化分析」イスラーム信頼学ワークショップ「信頼を可視化する」, オンライン, 2023-01-07.

太田絵里奈, 2022. 「15 世紀ウラマーの名目的師弟関係：「イスティドゥアーのイジャーザ」に基づく関係構築」日本オリエント学会第 64 回大会, オンライン/東京大学, 2022-10-30.

熊倉和歌子, 2021. 「15 世紀人名録『輝ける光』デジタルテキスト作成の試み」イスラーム信頼学ワークショップ「ウラマーのコネクティビティを可視化する：コンピューターによる分析の展望と課題」, オンライン, 2021-02-04.

Kumakura Wakako & Sunaga Emiko, 2022. “Visualizing Academic Networks and Trends through Acknowledgements: Japanese Scholars in Islam-related Studies.” DH2022 Tokyo, Online, 2022-07-28.

Fukami, Naoko, Sato, Susumu et al., 2022. “Morphological Analysis of Nineteenth-century Cairo.” The 1st International Conference of Remote Sensing and Space Sciences Applications, Harghada, 2022-12-10.

A. マレット, 2022. 「捕虜コミュニティにおけるコネクティビティ：17 世紀初頭のマルタにおける魔術業ネットワーク」『イスラーム信頼学ニュースレター』2, 20-22.

C01 班と連携する公募研究

Dai Yamao, Shingo Hamanaka “Political mobilization and its impact on voter turnout: A survey experiment in Iraq,” *Asian Journal of Comparative Politics* 6(4) 2021, pp. 421-440.

山尾大, 2023. 「英雄か脅威か？計量テキスト分析からみるイラクの世論と街頭行動の拡大」2023 年比較政治学会（第 26 回大会）, 山梨大学, 2023-06-18.

総括班

黒木英充・後藤絵美編『イスラームからつなぐ 1 イスラーム信頼学へのいざない』東京大学出版会, 2023. 『イスラーム信頼学 News Letter』No. 1-3. (2021 年 3 月 20 日～2023 年 3 月 20 日)

プロジェクト主催シンポジウム等

2023 年 2 月 18 日、21 日 連続講演会「TEI (Text Encoding Initiative) × Library が拓くデジタル人文学と図書館の未来」講演者：Yasmin Faghihi (ケンブリッジ大学)、Huw Jones (ケンブリッジ大学)

18 日「インターフェースを越えて：デジタル人文学のためのデータとしての TEI」

21 日「デジタルカタログとデジタルライブラリー：コレクションデータのための TEI の活用」

2022 年 11 月 26 日-27 日 イスラーム信頼学第 2 回国際会議 “Translation and Transformation in Muslim’s Connectivity” (A02, B02 と共催) .

2021 年 12 月 10 日-12 日イスラーム信頼学第 1 回国際会議 “Conflict and Harmony between State and Market” (A01, B01 と共催) .

2022 年 9 月 7 日 国際会議「ウクライナ戦争のグローバル・地域的影響に関する 中東・バルカン・日本の視点」(総括班) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・ペイルート拠点.

総括班と連携する公募研究

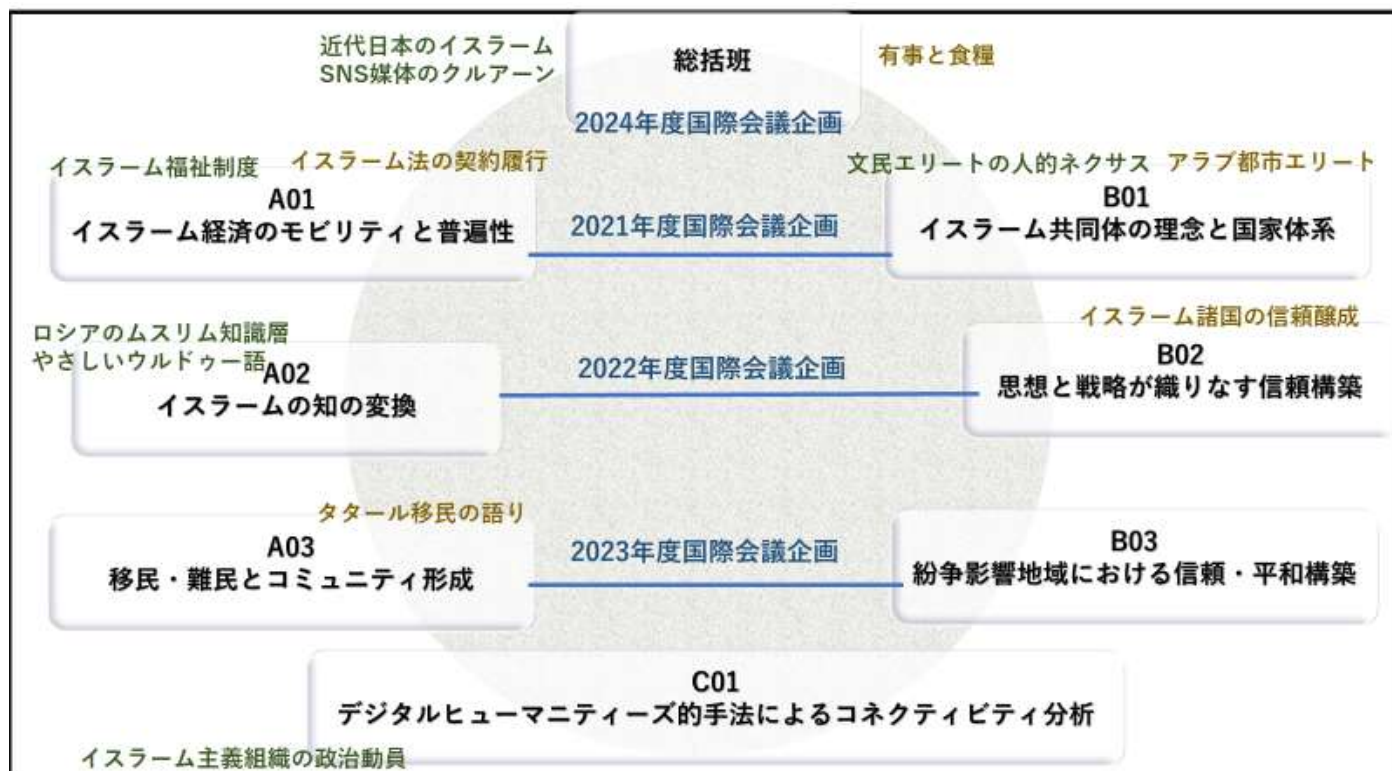
Kenji Kuroda, “Japanese Steamship Companies and Pause of the Hajj from Southeast Asia in 1915: Economic Rationality Behind the Muslim Mobility in the Indian Ocean and its Irony,” *Annals of Japan Association for Middle East Studies* 37(2), 2022, pp. 1-30.

二ツ山達朗「SNS 上でクルアーンを共有することの特徴と課題」第 62 回現代中東イスラーム世界・フィールド研究会 2022 年 11 月 26 日.

8 研究組織の連携体制

研究領域全体を通じ、本研究領域内の研究項目間、計画研究及び公募研究間の連携体制について、図表などを用いて具体的かつ簡潔に1頁以内で記述すること。

下図のように、X00 総括班（領域代表者、各計画研究班の研究代表者、事務局長、特任助教）が全体を束ね、デジタルヒューマニティーズを掲げる計画研究班 C01 が各計画研究班と自在に関係するなかで、特に研究テーマの関連性の強い計画研究班 A01+B01、A02+B02、A03+B03 が2021年度から2023年度にかけての国際会議を共同して企画することによって、領域全体の骨格を明確化している。



また、随時企画・開催される研究会としてのワークショップは、原則として複数の計画研究班の共催とするルールを設定し、A・Bの01、02、03同士に限らない研究分担者間の交流に努めている。さらに、ワークショップを他の科学研究費プロジェクト等外部の組織・団体との共催とすることも推奨し、外部との関係も強化している。

公募研究は上図において研究課題名の略称を小さなポイントで表示しているが（2021年度採択分が緑色、2023年度採択分が茶色の文字）、計画研究班のテーマに近いものは各班につき、計画研究班でカバーしていない分野については総括班付きとして、各研究代表者を中心に共同して研究を進める形としている。

なお、各計画研究班において研究員を雇用しているが（A03については総括班の特任助教が兼務）、それぞれの研究代表者を補佐し、研究班の研究活動に参加するとともに、計画研究班代表のうち最年少のC01 熊倉和歌子と総括班の特任助教・太田絵里奈とともに「Junior会議」という研究員間の連絡網をもって様々な情報を共有し、国際会議や全体集会など大型の催しに際して協働するほか、各自の研究内容の紹介を中心とした研究会も開催し、独自のネットワークを広げている。

9 若手研究者の育成に係る取組状況

研究領域全体を通じ、本研究領域の研究遂行に携わった若手研究者（研究協力者やポスドク、途中で追加・削除した者を含む。）の育成に係る取組状況について、具体的かつ簡潔に1頁以内で記述すること。なお、本研究領域が育成に取り組んだ「若手研究者」の定義を始めに示すこと。

本研究領域における「若手研究者」は、本領域応募時2020年3月段階で「若手研究者」とされていた当時45歳以下の研究者と、その後研究協力者、公募研究代表者、計画研究班の研究員、また研究報告を依頼もしくは募集・採用した研究者で、その時点で45歳以下の研究者をすべて含むこととする。

この定義に従うと、本領域応募段階で計画研究代表者のうち3名(A01, A02, C01)、研究分担者22名が若手研究者だったので全メンバーのうち**若手研究者割合は44%**、以後2021年度の公募研究採択者7名全員、2023年度公募研究採択者5名のうち4名（ただし他1名も博士号未取得なので学振の規定によれば若手研究者扱い）が該当する。また総括班特任助教、計画研究6班の延べ8名の研究員も全員若手研究者である。以上から構成メンバーとして若手研究者が十分高い比率を占めていると言える。

そして以下の諸点でこれらの若手研究者が積極的に研究事業に参加していることを強調したい。

① 総括班企画「信頼学のキッチン」

特任助教の太田が中心となり、各計画研究班の研究員、複数大学・組織の大学院生（修士・博士課程）など、現段階で若手研究者18名から構成される。月に1～2回のオンライン・セッションを通じて信頼論・ネットワーク論をめぐる読書会、国際学会参加レポート、海外調査報告、学会報告前の予備発表、デジタルヒューマニティーズのスキル修得を目的としたハンズオンなどを全員参加型のディスカッションにより行っている。ここから発展して複数班共催ワークショップの企画を実現した。

② 定期会合（通称「Junior会議」）

計画研究班C01代表の熊倉を中心に、特任助教の太田、各班の研究員で構成され、毎月1回、各班及びプロジェクト全体の運営をめぐるノウハウの共有のほか、国際会議、全体集会、シビルダイアログをはじめとする大型の総括班企画及び定期刊行物（イスラーム信頼学ニュースレター）について、企画立案から実現、運営に向けたブレインストーミングの場となっている。月例で開催される総括班会議と並行する形で若手研究者による運営のトラックを走らせる形であり、このJunior会議から総括班に提案されて実現したことも多く、たとえば2022年度全体集会におけるポスターセッション、2023年度国際会議における若手研究者のための特別セッションの場が設けられることとなったが、前者においては公募も含めて19件のポスター発表がなされ、参加した若手研究者同士のネットワーキングも進んだ。また、次の「**10アウトリーチ活動に係る取組状況**」にて取り上げるシビルダイアログ・キャラバン「動物がつなぐ世界」（2021年度）、「空と海がつなぐ世界」（2022年度）、シビルダイアログ企画展「学知の共創を考える：イスラーム信頼学シビルダイアログの試み」（2023年2月27日～3月10日、於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所企画展示室）や、上記「信頼学のキッチン」は、いずれもJunior会議におけるディスカッションから誕生した企画である。

③ 「シリーズ イスラームからつなぐ」執筆など

若手研究者はワークショップなど研究発表の機会を通じて自身の研究の練度を高めている。各計画研究班の研究員全員、公募研究代表者の大半が成果論集である「シリーズ イスラームからつなぐ」全8巻（東京大学出版会）において章の執筆を担当する形になっており、編者である研究代表者らとのやり取りを通じて研究の幅を広げている。

④ 広報活動への参画

ウェブサイト、SNSを通じたワークショップ、シンポジウム等のイベントの告知は各班研究員が行っている。2021年度以降は、研究員2名を主編集担当として、「イスラーム信頼学ニュースレター」を刊行している。執筆者・印刷会社との連絡・校正・権利関係の確認をはじめとする一般的な編集業務に加えて、号ごとの内容や執筆者候補の選定など、構想の段階から関連するすべての作業を各班研究員が担っているが、これらは今後こうした大型の研究事業を運営する際の経験知として有用になると思われる。

10 アウトリーチ活動に係る取組状況

研究領域全体を通じ、一般向けのアウトリーチ活動に係る取組状況について、具体的かつ簡潔に1頁以内で記述すること。

本領域のアウトリーチ活動は「シビルダイアログ・キャラバン」と名付けて次の3つの活動を中心に展開してきた。

- ① **保育園を会場とした展示・親子講座・園児向けワークショップ・地域（および地域外）の人々の双方向的複合企画事業。**2021年・2022年の11月に総括班の特任助教・太田絵里奈氏が中心となり、世田谷代田仁慈保育園にて総括班と同園、および東京外大AA研との共催により2週間にわたって実施した。テーマはそれぞれ「動物がつなぐ世界」「空と海がつなぐ世界」であり、敢えてイスラームをテーマに押し出さず、動物や天文学・旅行記を中心としたグローバル交流史を中心にすえる形にした。シティズンシップ教育の「社会との共創」を目指す立場から、一方的な「教える・教えられる」関係でない真の双方向性をもつ、出入り自由の開放的な場を設けた。園児を始め子ども向け、親を始め大人向け両方の内容を備え、「交流史」の中から間接的にイスラーム文明を意識する仕掛けが工夫されるとともに、「マインドマップ」（参加者が感想や意見を自由に付せん書き込んで大型の白地図に貼り付けてゆく作業）を共に作り上げるなど、人々の開放的な参加を可能にした。その結果、保育園での開催ゆえに事前の広報をしなかったにもかかわらず、合計2,000人を超える来場者を得るとともに、太田特任助教が京都大学学際融合教育研究推進センターやこども環境学会での講演、東京外大・学際研究共創センター主催「越境する知の共創シリーズ」ワークショップに招かれるなど、大きな反響を呼んだ。企画には本領域雇用の研究者ら若手も多く協力しており、自らの専門的研究をめぐる、社会に対して問いたい根本的なものや共有を望むものは何か、深く考える機会も提供した。従来アウトリーチ活動にはない、斬新で大きな潜在力を秘めた試みである。
- ② **地方自治体（新居浜市国際交流協会）との共催講演会。**研究分担者・岡井宏文氏が以前より日本人ムスリム（故人）へのインタビューなどを通じて関係を深めていた愛媛県新居浜市にて、その方の生涯と足跡（「シリーズ イスラームからつなぐ 1」『イスラーム信頼学へのいざない』所収の岡井論文参照）をたどる講演会を、同市国際交流協会との共催で2022年12月に対面形式で開催した。イスラームを介して地方都市と世界（マレーシア、シンガポール、エジプト、リビア）をつないできた日本人について研究者が語ることで、インドネシアやバングラデシュなどの国々出身のムスリム労働者を多数受け入れる地方自治体の多文化共生政策に寄与している。
当初、シビルダイアログはこうした地方自治体や首都圏・関西圏以外の地域においてより活発に展開する予定であったが、COVID-19の影響により想定通りに進んではないことを認めざるを得ない。現在、大分、富山といった地域における活動を準備中である。
- ③ **激変する国際情勢を読み解くオンライン講演会**の開催。2021年8月の米軍アフガニスタン撤退とその後の混乱の解説（8月20日）、2022年2月のロシア軍のウクライナ侵攻の多角的分析（3月25日）、2023年4月のスーダンにおける国軍・非正規軍間の全面衝突の原因説明（4月27日）といった講演会・シンポジウムを、外部の専門家も適宜招いてオンラインにて開催した。報道で扱われることが稀な長期的な背景説明に加え、重層する諸要因について時間をかけて丁寧に解説することで、各回それぞれ561,308,192人の視聴者に有益な情報提供ができたと考えている。

なお、「6 研究の進展状況及び主な成果」の計画研究A03班の部分でふれたように、アルジャズィーラ社の良質なドキュメンタリー作品（パレスチナ人の周辺離散先における歴史教育をめぐる苦闘を描いたもの）に同社の承諾を得て日本語字幕を付け、大学等教育機関やNGO団体による非営利的上映の許可を得たことは、今後のシビルダイアログ・キャラバン推進のために有益と考える。

また、上記「シリーズ イスラームからつなぐ 1」『イスラーム信頼学へのいざない』（東京大学出版会2023年）は、各計画研究班の研究代表者を中心とした執筆陣により、本領域の研究内容をデスマス調文体で可能な限り平易な表現をもって紹介する形をとっており、大学入学直後の学生や高校生を第一の読者層と想定している。このため、一般読者にも十分届くことのできる内容であることから、アウトリーチ的成果刊行の側面を有している。

11 研究費の使用状況・計画

研究領域全体を通じ、研究費の使用状況や今後の使用計画、研究費の効果的使用の工夫、設備等（本研究領域内で共用する設備・装置の購入・開発・運用、実験資料・資材の提供など）の活用状況について、総括班研究課題の活動状況と併せて具体的かつ簡潔に1頁以内で記述すること。

本研究領域は2020年11月末に採択通知があり、2021年1月9日に第1回全体集会(キックオフ会議)をオンラインで開催したが、COVID-19の強い影響下で開始することとなった。このため、2020年度から2022年度にかけて、当初予定した国際的事業の変更を余儀なくされることが多く、繰越により対応したが、2022年度途中から海外渡航も徐々に増加し、2023年度から通常路線に復帰した。

① 事務局設備とオンライン機材の充実

2020年度は本研究領域の採択後、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所内のスペースを事務局として利用するために急ぎ環境を整備した。複数の事務局員が作業可能で重要な機材を置くことができるよう、ハード面を整えるとともに、COVID-19感染状況拡大に対応してオンライン会議・研究集会を開催できるよう、Surface Hubをはじめ、オンライン対応の音響機器などを急遽配置した。また、貴重書を始めとした書籍文字情報の効果的なデジタル化を進めるため、C01班予算にてImage Access社製ブックスキャナーを購入して東京外国語大学に設置し、利用に供している。

② 大型資料の購入

本領域研究が重要なキー概念として位置付けるコネクティビティを歴史的に考察する際に重要な地域となるのが中東からインド洋、東南アジア、中国を中心とする東アジアまでの広範な地域であるが、その近代史をカバーし、多くの研究者に資するイギリス東インド会社関連史料(East India Company Module)を総括班費用で購入し、東京外国語大学に配置して研究者の利用に供している。

また、イスラーム研究にとって必須の基礎的資料であるオンライン「イスラーム百科事典」(Encyclopaedia of Islam)を購入し、東京外国語大学に設置して利用に供している。

③ 研究成果論集刊行の準備

本領域研究の研究成果の社会還元を重要な使命として位置づけていたが、通常はプロジェクト終了後に刊行する例が多いが、本領域研究は領域設定期間内に刊行することに決定した。そのために、東京大学出版会より全8巻からなる成果論集「イスラームからつなぐ」シリーズ刊行の費用を、総括班研究費から支出することとした。

12 今後の研究領域の推進方策

研究領域全体を通じ、今後の本研究領域の推進方策について、「これまでの学術の体系や方向を大きく変革・転換させることを先導する」観点から、具体的かつ簡潔に2頁以内で記述すること。なお、記述に当たっては、今後実施する公募研究の役割を明確にすること。また、研究推進上の問題点がある場合や、国際的なネットワークの構築等の取組を行う場合は、その対応策や計画についても記述すること。

これまで本研究領域の開始直後から COVID-19 による海外・国内の移動規制の影響を受けていたが、今後2年間弱の期間はそれが弱まって平常化に向かうことが見込まれるため、海外調査・海外の研究者招聘をより活発に展開する予定である。その前提の下、次の諸項目について推進してゆく。

① 「シリーズ イスラームからつなぐ」第2巻―第8巻(東京大学出版会)の刊行

通常、こうしたプロジェクトの終了後に成果論集が刊行されることが一般的であるが、本研究領域は実施期間中に全巻刊行を終了する予定である。これは研究分担者を始め執筆者に大きな負担を強いるものであるが、執筆過程においてこそ可能な新たな問題発見や研究結果のとらえ直しを狙ったものでもある。執筆者会議で相互批判・評価する作業を通じて共同研究の確実な深化が見込まれる。これまで強調してきたように、本研究領域がイスラームを宗教学的に究めたり他の宗教との違いを際立たせてその独自性を主張したりするのではなく、イスラーム文明の歴史と現在の総体の中から世界の分断・分極化をのりこえるための暗黙知を探り出して戦略知に鍛え上げることを目指すものである。従って、ともしばば個々の研究者が従来の自らの研究の単純な延長線を引きがちになるのに対して、社会とのつながりを意識した、より開かれた論述を求めていくことが必要となる。この作業をシリーズ各巻執筆過程において各巻編者すなわち各計画研究班の研究代表者が行うよう、相互に確認する。

② 2023年度、2024年度国際会議の実施

各年度 A、B のヨコのつながりで共同企画してきた国際会議について、2021年度は完全オンライン、2022年度はハイブリッドで開催したが、2023年度(A03・B03共同企画、2024年3月1-3日)、2024年度(X00すなわち全班共同企画)は、基本的に対面式(オンライン視聴の可能性は残すものの)で開催する予定である。いずれにおいてもイスラーム文明やムスリム(・非ムスリム)社会のコネクティビティと信頼構築とを鋭角的に論じることで暗黙知・戦略知を提示できるような機会とすべく構想・準備する。2021年度からの報告も踏まえて選択し、本研究領域終了後に英文論集を編集・刊行する予定である。これまでの海外からの会議参加者や招聘者、あるいは海外でコンタクトした研究者の多くが本領域研究の趣旨に強い興味を示していることから、従来見られなかったような性格の研究書を国際学界に問うことになるであろう。

③ 2023年度、2024年度全体集会の実施

2023年度全体集会については、地域研究コンソーシアム年次集会との共催(11月18日)とすることがすでに決定しており、本領域研究の外部組織との連携をさらに進める。最終年度の全体集会についてはまだ具体的な検討は進んでいないが、研究成果を効果的に発信する機会としたい。

④ 海外研究機関との連携強化

COVID-19が収束に向かいつつあることから、従来、本研究領域と密接な関係を持ってきた諸機関——国立ミンダナオ大学(フィリピン)、タズキア研究所(インドネシア)、パンジャブ大学(パキスタン)、カザフスタン教育科学省附属東洋学研究所(カザフスタン)、イスラーム開発銀行イスラーム研究所(サウジアラビア)、バイルート・アメリカン大学(レバノン)、ドイツ・バイルート・オリエント研究所(レバノン)、オーストリア科学アカデミー・イラン学研究所(オーストリア)、エクセター大学アラブ・イスラーム研究所(英国)、ダラム大学中東イスラーム研究所(英国)など——との関係を再強化するとともに、上記国際会議で招聘した研究者らとの交流を通して、彼らの所属する研究機関との連携を拡大していく。最終的にそれを「イスラーム信頼学研究プラットフォーム」とする予定である。たとえば、2023年5月に東京のドイツ日本研究所が中心となって世界各地のドイツ研究所の代表者たちが東京に集まる会

議があり、そこでドイツ・バイルート・オリエント研究所の所長と領域代表の黒木（バイルートの中東研究日本センター長）らがパネリストとなって、「中東・日本・ドイツ三角形の研究位置」セッションが設けられ、そこで本研究領域を紹介したが、その後さっそく 11 月にバイルートで両研究組織の共催事業を企画し、計画研究 B03 班の佐原徹哉氏が参加する方向で準備が進んでいる。

⑤ アウトリーチ活動の拡大

これまで、「シビルダイアログ・キャラバン」の一環として保育園での複合企画のような大きな注目を集めるアウトリーチ活動も行ってきたが、一部の若手研究者に負担が集中することとなった。このため、今後はより多くの関係研究者がこうした活動に少しでも携わるよう、たとえば計画研究班ごとに一つの催しを（共催も含めて）企画・実施することとしたい。

⑥ 公募研究代表者と若手研究者の巻き込み

上記の①－④のそれぞれに公募研究代表者、若手研究者が密接に関係している。

①については、2023 年度からの公募研究代表者 5 名のうち 3 名が、全研究分担者（うち 4 割以上が若手）と共に参画しており、新任の C01 班以外の計画研究班の研究員 5 名（うち 1 名は第 1 巻に執筆済み）、さらに外部から 3 名の若手研究者を執筆者に迎えている。

②については、現在準備中の 2023 年度国際会議において、若手研究者中心のテーマを強く限定しないショートプレゼンテーション及びポスター発表の特別セッションを設ける予定であり、報告者を「信頼学のキッチン」参加の若手研究者から積極的に募るとともに公募枠も設定する。その募集、運営は各班研究員が担う予定である。

③④⑤についても、若手研究者の登壇や派遣を積極的に進める。

⑦ デジタルヒューマニティーズの普及

多くの分野でデジタルヒューマニティーズに対する高い関心が寄せられているため、C01 班と連携しつつ、RDF（Resource Description Framework）やデジタルアーカイブを用いたアウトリーチなどをテーマに、外部講師を招いたデジタルヒューマニティーズのハンズオンを実施する。

13 総括班評価者による評価

研究領域全体を通じ、総括班評価者による評価体制（総括班評価者の氏名や所属等）や本研究領域に対する評価コメントについて、具体的かつ簡潔に2頁以内で記述すること。

総括班評価者（本研究領域内部では「評価委員」としている）は次の3名である。

加藤 博（一橋大学名誉教授）専門：経済史学

鷹木 恵子（桜美林大学教授）専門：文化人類学

三浦 徹（お茶の水女子大学名誉教授）専門：歴史学

いずれも中東地域を研究対象とし、本研究領域の趣旨について深い理解を有する学識経験者である。

これまで第1回・2021年3月18日（オンライン）、第2回・2022年3月14日（オンライン）、第3回・2023年3月2日（対面・オンラインのハイブリッド）と3度にわたり評価者会議（本研究領域内部では「評価委員会」）を開催してきた。同会議には総括班メンバー全員が出席し、本研究領域担当の学術調査官にもオブザーバ参加を頂いている。毎回、総括班・各計画研究班代表が年度末に当該年度の活動内容に関して報告を行い、それに対する意見を委員に求める形をとってきた。

評価者には全体集会や国際会議、ワークショップなどへのオブザーバ参加を通じて、本研究領域の活動実態を折に触れて把握する機会を確保頂いた。主な意見は次の通りである。なお、「→」をもって示した反応の内容は必ずしもその会議の場におけるものだけではなく、その後の対応も含めた現段階のものである。

第1回評価委員会

当時、本研究領域が始動して3か月という間もない時期であったため、委員からは激励とともに次の3点が注文として提示された。

①「イスラームを外してイスラームを論じる」ことを心がける。

若干逆説的な表現であるが、イスラームという大枠を維持しながらも、常に比較の視点を忘れずに一般化・抽象化を思考のプロセスに入れるべきであり、そこからあぶり出されてくる問題の重要性を認識し、本質主義に陥ることなく、またイスラームに安易に還元せずに、実証的に追究すべきである。

②「コネクティビティ」や「信頼」の問題に正面から取り組む。

プロジェクトのキーワードにはワークショップで必ず言及するべきであり、何となく関係しているような形でお茶を濁してはいけない。こうしたキー概念自体に関する研究会を開催しても良いのではないか。信頼は文化の基盤であり、不断の努力による戦略的な働きかけが支えているので、その暗黙知を是非とも明らかにするべきである。

③ シビルダイアログ・キャラバンのような市民との対話に重点的に取り組む。

NGOや市民といった研究者以外の社会との対話、さらには文明間対話のレベルまで、研究と運動とを有機的につなげるべきである。

第2回評価委員会

本研究領域のほぼ1年の実質的活動を経て、次のような要望意見・質問が示された。

④ 新たに知りえたことを明らかにせよ。

ワークショップなど活発に開催したことは分かったが、そこで何が明らかになったのかというエッセンスの部分を示すべきである。ウェブサイトには研究会開催情報は網羅的に挙がっているが、研究会報告のないものがあるので改善すべきである。

→事務局より、ワークショップ終了後に毎回報告を提出するようメールで催促する態勢とした。

⑤ ワークショップ（研究会）の開催形態について

研究分担者など構成メンバーによる報告が一巡したようなので、これまでまったく関係がなかったような研究者にも声をかけて、コネクティビティと信頼に正面から向き合う研究会を開催するべきである。

→ゲスト報告者、海外の研究者によるワークショップはそれなりに多数開催し、またワークショップのタイトルに可能な限り「コネクティビティ」「信頼」の用語を含めるよう促したが、コネクティビティや信頼に関してイスラームから離れた理論的な議論をする研究会については後手に回った。「信頼学のキッチン」(上記「**9 若手研究者の育成に係る取組状況**」の①参照)でその種の研究書の読書会が開催されたことはそれゆえのことであろう。なお、加藤委員、三浦委員と領域代表・黒木がオンライン座談会を行う中でこの問題を取り上げて論じた。

ニュースレターNo.2「特集 信頼学のキーワードを考える」(オンライン座談会「イスラームの都市性」から「イスラーム信頼学に向けて」より) pp.28-32, 2022年3月20日(座談会2021年10月9日)
<https://connectivity.aa-ken.jp/newsletter/650/>

⑥ シビルダイアログ・キャラバンの評価

保育園での複合企画(上記「**10 アウトリーチ活動に係る取組状況**」の①参照。2021年度分)でイスラームを前面に出さずに「つながり」をテーマにしたことは高く評価できる。

⑦ 国際会議について

国際会議でCall for Papers を行い、公募すれば本領域研究の国際的発信にもつながるのではないかと。また海外の学会に積極的にパネルを組んで出かけるべきではないかと。

→過去に海外へ直接Call for Papers を出した会議を経験しているが、その対応処理に労力がかかる一方、想定した効果は上がらなかった。最初からテーマに応じた最適な研究者を探す方が効率的である。COVID-19が収束に向かうにつれ、海外学会に研究者個人として招聘されるなどして参加することが増えてきたが、パネルを組むまでには至っていない。むしろ、国内の若手研究者を年度開催の国際会議に参加させる課題を優先したい。

⑧ 委託研究について

COVID-19の影響を受けて海外の研究機関に調査を委託した例があるようだが、自分たちの主体性は維持されているのか。

→調査委託はこれまでに長期にわたり密な関係を維持してきた機関であり、十分な意思疎通が取れており、問題ない。

⑨ 若手研究者が中心になって行っている読書会について

「信頼学のキッチン」で行っている読書会は非常に良い試みなので、続けるべきである。

→読書会で扱った書籍の紹介を「ブックガイド」として本領域研究のウェブサイトへ寄稿する予定である。

第3回評価委員会

前年の意見を受けて、計画研究各班代表はこれまでの活動を通じて何を知りえたかを提示した。

⑩ あらためて班構成について

計画研究班の間で連携して活発に活動してきたのは理解したが、AとBの関係を再度説明せよ。テーマの抽象度が異なるのではないかと。

→計画研究班間の横の関係が緊密化してきた結果と言える。ただし抽象度の違いは指摘の通りだが、人文社会系の大型科研ではその違いの意味をどのように解釈し、総合的な知に昇華させてゆくかが重要な点であろう。今後の課題である。

⑪ (特に計画研究班A01(イスラーム経済)の)地域間比較の研究について

異なる時代、異なる地域の比較を通じてイスラームに特徴的なものとして何が浮上したのか

→イスラーム経済は、様々な地域・時代の要素を異種混合的に吸収するなかで成り立っており、そこから普遍性を獲得していると思える。イスラームと○○、イスラームと××という対比による差異を明らかにすることではない。

⑫ デジタルヒューマニティーズについて

非常に重要な分野であり、その拡がりに期待したい。